役の行者（えんのぎょうじゃ）　三幕六場

坪内逍遙

第一幕
第一場　山村路
第二場　山麓の一軒家
第二幕
第一場　大峰林中
第二場　西谷の魔所
第三幕
第一場　大峰の山中
第二場　山上ヶ岳の岩窟

第一幕

第一場　山村路

大和国吉野郡大峰（おおみね）の麓、今の洞（どろ）川村辺から余り遠くない処。見渡す向う一帯に樹木の繁茂した山や阜（おか）が遠く近く波打っている。細い川が流れている。大（おお）天井、小天井などという峻（けわ）しい峰々も見える。阜の間々に三四軒の千木（ちぎ）を高く聳えさせた杉皮葺きが見え、又所々に稲田がある。

今ちょうど太陰暦の八月下旬なので、早稲（わせ）は已（すで）に刈り取り、田は刈り跡になっている。

時代は文武天皇の朝、時刻は今の午前十時過。

右手（上手）から旅の者らしき主従の男女が出て来て、下の問答をしながら、左へと通り抜ける。女は賤しからぬ服装（みなり）で、齢は八十歳位、品よき容姿（かおかたち）。盲目で、腰は殆ど二重（ふたえ）になりかけているが、それでも杖を突いて、徒歩している。男は三十年輩で、実体（じってい）そう、一剣を腰に佩び、布で包んで革で巻いた旅荷物らしい物を脊負い。片手には笠を持ち、片手では老女の手を牽いている。この従者の名は青虫（あおむし）。

青虫　だんだん爪先上（つまさきあが）りになりまする程に、さぞお草臥（くたび）れなされたでござりましょう、手前の肩

にお掛かりなされませ。ちとお負い申しましょう。

老女　いやいや、まだそれには及ばぬ。したが、近くに人家はないかのう？　ちっとの間休息したい。

青虫　へいへい。（左手を見やりて）彼処に一軒家が見えまする。たかが八九町程でござりましょう。

老女　では其処へ案内してくりゃれ。

青虫　かしこまりました。こうおいでなさりませ。

主従が通り抜けてしまうと、殻竿の音が頻りに聞えて、次ぎの女声の稲打ち唄が洩れて来る。間々にエーイエイと女の声で掛声をする。

唄　〽おォらが脊戸の柿の木に、エーイエイ、今年ゃ柿の実がようなった。なったともなったとも。

エーイエイ……

唄の半ばに場面が一転する。

第二場　山麓の一軒家

同じく大峰の麓、今の洞（どろ）の辻附近らしい。間近く左手に寄って、一軒の古風な農家がある。間近く左手に寄って、一軒の古風な農家がある。間口はやっと二間半ぐらい、見えている奥行は二間、家根は千木を聳えさせた杉皮葺き。左手は葺降して小さな物置兼帯の脊戸（せど）への通路が附いており、その入口には菰（こも）が垂れてある。母屋（おもや）の奥も幾枚かの菰で見切り、その他は開け放し。

中央に炉、原始的な自在に釜のようなものが掛けてある。物置の後ろには竹藪があり、母屋の右手の奥には一本の柿の木、実が赤く熟している。ついその傍に筧（かけひ）。水が溜（ため）から外へ清らかに流れ出して小川へ落ち込む。実は、この筧に面した二間間口がこの家の入口なのである。

右手は山の裾で見切られ、見渡す正面は遠近の山々、いずれも樹木が繁茂しており、間近き阜（おか）の此方には、刈り跡の稲田が少し見え、その稲田の手前には清らかな小川が流れており、無雑作に丸太を二三本並べた橋が、洞の辻への往還に架（かか）っている。この小川に沿うて田圃へ通う路が一筋右手へと走り、間近の山の裾で隠れてしまっている。

農家の上り口――幹を皮附のまま輪切りにしたやつ――に近く、主人らしい六十五六の爺が、古風な原始的の竹の稲扱機械で、稲を扱いでいる。それよりも右手、殆ど往還を占領

して、二人の若い娘が殻竿を揮(ふ)って、唄を歌いながら稲を打っている。これは姉妹で、姉は十八九、妹は十五六、二人とも標致(きりょう)よしで、日に焼けてはいるが、本来は色白である。姉の名はヒツジ。妹の名はエブリ。稲打ち唄が続く。

唄　〽九つ小枝に皆実(な)った。エーイエイ。色づいた。たアれに食わしょと色づいた。ヨイヨイヨイトナ。

唄が切れると共に、二人とも殻竿を下して、息を吐(つ)き、頭に結(ゆわ)えていた布片を取って、汗を拭う。爺も手を休めて

爺　さアさア、きつかったきつかった。……まアまア一休みせいと言うところじゃが、きょうは朝の間から変(けぶ)な空模様で、今にもぽつりぽつり降(お)ちて来そうじゃ。午前(ひるまえ)にしまわぬと事じゃ程に、姉は、早うお母(か)さの処へ往(い)て、刈りためただけを取って来いやい。早うせい、早うせい。

姉　あいあい。

と姉娘は、とっかは丸太橋を渡って、田圃道を右手へと姿を消す。妹は箕(み)を物置から持出して来て、打ち溜めた籾(もみ)を掻集めにかかる。と突然(だしぬけ)に大ドロドロ。妹娘はびッくりして箕

を落す。

妹　あれ、地震じゃ！

爺　いやいや、地震ではない、（ドロドロ尚おつづく。）これがソレゆうべ話した、あの大峰さまの山鳴りじゃがや。

妹　え、では、あの山の主さんの祟とやらかえ？

爺　（うなずきながら）どうか甚いことにならねばえいがのう。

爺が框に腰を掛けると、娘も箕を抛出しておいて、同じく傍へ来て腰を掛ける。

妹　お父さ、わしゃあの昨夜の話は、役のお行者さまが葛城山の何処やらから余所のお山の何処やらへ、磐橋とやらを架けさっしゃる処までは聞いていたが、だんだん怖らしゅうなったゆえ、指で耳に栓を支うて、つい知らん間に眠てしもうた。したが、昼間なら怖うはない。もう一遍話して下され。

爺　いやいや、聴かいでおけ、又夜中に魘りょうぞい。……どうやら、山鳴りは止んだらしい。（と言いながら、二三歩外へ出て空を見て）いよいよ一雨来そうじゃわい。

この途端に、田圃道づたいに、六十近くの婆、姉娘と一しょに、刈りためた稲を脊負いつつ、急ぎ足に戻って来る。

婆　（丸太を渡りながら）きつい山鳴りじゃったのう。ちょうど十五年ぶりじゃ。

爺　（むずかしい貌（かお）をして）此間じゅうの遠鳴りといい、今のどえらい鳴りようといい、こりゃ何か西谷（にしだに）あたりで、事があったに相違ない。

婆　何にせい、役の行者さまはおるす、前鬼（ぜんき）さん、後鬼（ごき）さんまでござらっしゃらんというから、きっと、あの山の神さんが荒れ始めさっしゃったに違いない。

妹　（先刻からいよいよ目を円くしていたが）十五年前にどんな事があったえ、え、お母さ？

婆　山籠りをしていた若い行者衆が、二人（ふたアり）までも、洞川の川上から、死骸になって流れて来た。ちょうどそれが、今のような山鳴の翌日で、その時にもお行者さまはお留守じゃった。

姉　（心配そうに）若い行者さんと言や、あの都の若行者さんに、怪我でもなければえいがなア。

妹　姉さ、都の行者さん言うは、あの去年山籠りさっしゃった、あの色の白い、目の涼しい、優しい人かえ？

姉　うん。親御衆と仲たがいして発心（ほっしん）したといわっしゃった、あの品の可（え）い若いお人。（と、じっと考え込み）あああああ、わしゃ昨夜話を聞いてから、あの人の事が気になって、風が甚（きつ）う吹いて来てさえも、怖うてならぬ。

ト問答の間、爺と婆とは何か小声で話していたが

爺　こりゃいよいよ雨らしいによって、もう今日は、何もかもしもうた、しもうた。

婆　もうかれこれ昼じゃ。姉や、おのしは米磨(と)いで、午飯(ひるめし)の支度してくりゃ。

姉　あいあい。

姉娘は小桶を奥から取出して来て、箕の傍で米をかしぎ、次ぎの話の間に飯を焚く支度よろしくある。爺と婆とは稲を脊戸へ運んだり、稲扱機械その他を方附けたり、何かと忙しい。妹娘は、それを手伝って方附けながら

妹　お父(と)さ、山の鳴るわけを話してくだされ。山の主(ぬし)さんたらいうは何じゃえ？

爺　怖い程に聞かいでおけ。

妹　いえいえ、わしゃ聞きとうてならん。……お母(か)さ、お前聞かしておくれいな。

婆　（方附け物をしながら）じゃ聞かそう程にの、早うそれを方附けてしまや。

妹　あいあい。

爺は奥へ入り、婆は、やっと框に腰をおろす。

婆　ああ辛度(しんど)や辛度や。

妹　（同じく腰をかけて）さ、話しとくれ。

婆　おのし達はなア、晩(おそ)う生れたによって仕合せじゃ。おら共の若い頃までは、ここいらは、それはそれは怖い恐ろしい処じゃったぞよ。この界隈十里四方というものは、山で無い処も深藪のように草や木が繁って、田畑もなく、人家らしいものは、只の一軒もなかった。狼が昼日中うろつく。蟒蛇(うわばみ)がのたくり廻る。そればかりでない。山猫じゃの、狒々(ひひ)じゃの、荒熊じゃの、猪(しし)じゃのいう猛獣(けだもの)が、野にも山にも、のそのそと歩いておって、そっとでも人間の臭いがすりゃ、直(じき)に跳び出して来て、取って食うたものじゃ。それを思うと、今のこの安らかさは、みんなみんなお行者さまのお庇(かげ)じゃ。これで若しあの葛城山の磐橋さえ出来上っていようものなら、どのように人間の仕合せが殖えたか知れんに、惜しいことであった。

妹　磐橋の事よりも、わしゃ山の主さんの話が聞きたい。

爺　せわしない。これからがその話じゃ。

この問答の間に、爺、奥から出て来て、胡坐(あぐら)をかき、湯か何かを飲んで話を聞いており、折々口を出す。

その山の主さんというは、名を一言主さんというて、今から三四十年前まではこの界隈きっての荒神さんでのう、それがまた毎日毎晩何遍とのう、猛しい獣類の生き胆を食わっしゃらんでは神通力が弱る神さまじゃげなで、それでその都合で、わざとここいら一円に、猛しい獣類を蕃殖しておかっしゃったものじゃ。

爺　人間の為には、それがどのくらい迷惑になったか知れん。月に二三人ぐらいは、きっと獣類の餌食になって、非業の最後を遂げたものじゃ。役の行者さんがござらっしゃらなんだら、この大和一円、人種が尽きたかも知れん。

婆　それから、その一言主さんのお袋さんに、葛城の神さんという、我強い執念深い、怖ろしい女神さんがあってのう、その女神さんがまた業通が自在なので、この界隈のどこの山の主さんも、又森や河や池や沼の精霊さんたちも、この親子の神さんには抵抗くことが出来ず、言うなり次第になってござったので、親子の神はいよいよ増長して……

妹　お母さ、お前、一言主さんを見たことがあるかえ？

婆　何の！　今生きている者で、見た者は、一人もない。昔からの言い伝えでは、丈が一丈もあって、顔や手や胴は人間じゃが、胴から下は牛のようでもあれば、熊のようでもあると言うことじゃ。

爺　ある活神様の行者様のお行力でなければ、迚もあの親子神をば祈り伏せることが出来んのじ

やった。行者さんでさえ八十一昼夜かかって祈り伏せさっしゃったげな。

婆　それはそれは、えらい荒行をさっしゃったげな。

爺　それからは行者さんは、母子の神を御眷属同様にさっしゃって、人助けの為にとて、先ず手を着けなされたのが、あの磐橋じゃ。

妹　今、半端のままで残っているというのがそれかえ？

爺　そうじゃ。葛城山から金剛山への道は、迚も迚も並の者では通うことの出来ん嶮岨じゃが、それを年に十五六遍も往来するようにならんうちは、一ぱしの行人とは言われんことになっていたので、昔からそれをしょうとして、命を落いた者が、何百人あったか知れん。

婆　お行者さまが、それを不びんに思わっしゃって、一言主さんに吩咐けて「おのし改心の証しにおのしの眷属は勿論、この界隈の山の主たちを残らず使うて、とっとと磐橋を架けい」と言わっしゃったげな。さ、それからというもの、夜も昼も、人間の目にこそ見えなんだれ、神たちが神通力で、小山のような大岩を幾つも幾つも運ばっしゃる、積まっしゃる、畳まっしゃる、見る見る谷と谷との間に連絡が附いて、不思議な岩の橋が出来かけたげな。

爺　ところが、十日経ち、廿日経っても、仕事がねっから捗らんので、行者さんは腹を立てて、一言主さんを呼出いて、何遍も何遍も叱らっしゃったげなが、埒が開かん。これには何か仔細があろうと、他の神さん達を呼んで、だんだん査べさっしゃると、やっと知れた、磐橋の出来んのは、一言主さんの横着であったのじゃ。

妹　というのはえ？

婆　人間のお行者さまに使われるのが悔しゅうてならんのじゃげな。それにお袋の葛城さんが傍から煽り立て、磐橋の邪魔ばかりではなく、折を見てお行者さまを殺いてしまおうと企んでござるのが知れたので、そこでお行者さまが、呪縛いうことを行わっしゃったげな。

妹　呪縛いうはどうすることじゃえ？

爺　されば、お行力で、西谷の奥の大樟の木の股へ、山の主さんを挟み込んでしまわっしゃったのじゃ。それから又行者さんは、西谷の四方七町の間を結界して、並の者は勿論、樵夫でも狩人でも、行人でも、それから奥へは決して一足でも踏込むことはならん、覗いて見ることもならんと掟さっしゃった。それからというものは、悪い獣もいず、荒神さんも鎮まり、この界隈がだんだん開けて、畑の物も出来りゃ稲も出来て、こんな住みえい処になった。

婆　それは今から三四十年も前のことじゃ。

爺　が、とかく怖い物は見たいもの、為なということは為たいもので、その当座には、大抵五年目に一人位いずつ掟を犯いて、そっと西谷へ覗きに往っては、二つとない命を落いたものじゃ。それがだんだんに少のうなって、西谷の噂をする者もなく、この十五年の間は……

この話の間に又もドロドロが聞えて来る。次ぎの問答の間、それが激しくなったり、微かになったりして続く。

婆　や、又山鳴りじゃ！　この様子では十五年前よりも甚(えら)いことになるかも知れん。

第一場の旅の主従が右手（上手）から出で来り、農家の前へ来て立停る。

青虫　ちと御無心がござる。主人のお方が、いこう草臥(くたび)れさっしゃれてござる。どうぞ暫時の間、休息させてあげて下され。

爺　心易いことじゃ。さアさア、こちへ掛けさっしゃれ。折わるい空模様じゃに、どちらへござらっしゃります？　これからは爪先上りで、お年寄には難儀な路じゃに。

主従框に腰を掛ける。

青虫　大峰の奥まで参るのでござるが、して爰許(ここもと)からはもう何程ござるな？

爺　めっそうなことをいわっしゃります！　お山へは女人(にょにん)は禁制(きんせい)。そうでのうても、いっかないかな、女子(おなご)の身では年若でも行かるる処ではない。それにアレ、あれを聞かっしゃれ。きのうきょうは、あの怖ろしい山鳴りじゃ。血気壮(さか)んの者でも、もうきょうからは、木を伐(こ)りにも行かれますまいわい。

老女　いや、その嶮岨は、予て聞いて、覚悟の前でござる、女人禁制の事も心得たれど、役の行者どのには深い由縁もあり、心願あって、はるばるの処より、盲目同然の身で、尋ねて来た者。たとい今日は登られずとも、明日は剛力衆を雇うてなと、お山登りをせねばならぬ。気の毒ながら、こよい一夜、此家に泊めておくりゃるまいか？

爺　どうした心願や由縁がござらっしゃるか知らんが、それは迚も叶わんこっちゃ。肝腎の御本尊さまがお留守じゃ。

青虫　えッ！　役の行者さまは？

婆　とうから遠い遠い処へ往かっしゃってでござります。

老女　なに、行者どのは、今は山におられぬとや？

婆　お行者さまがござらぬばかりでなく、お使わしめの前鬼どの、後鬼どのもござらっしゃりませぬ。それなればこそあの山鳴りじゃ。

旅の主従は顔を見合せて、溜息を吐く。山鳴りは薄くなったが尚お続いている。

青虫　前鬼どの、後鬼どのとやらは、予て噂に聞いた、お行者のお傍仕えの人達じゃな？

爺　いやいや、人ではない。成程、もとは人間であったのじゃが、大事の我児五人まで非業に亡い、それから気が狂うて、最ち末が死んだ時、その死骸を食うてしもうて、夫婦とも生き身の

ままで鬼になったのが、前鬼どの、後鬼どのじゃ。

婆　お行者さまのお功力(くりき)で善心に立帰らしゃらなんだら、一生、狒々(ひひ)や狼同様に、人間を食うて果さっしゃったであろうのに、今は無二のお使わしめじゃげな。せめてあのお二人がござらっしゃりゃ、よもや山鳴りなぞは始まりゃすまいに。

青虫　他に、お行者のお弟子とてはござらぬか？

婆　たった一人おられます。五人六人とお傍にござったこともあったが、何にせい荒行ゆえ、辛抱が出来ず、みんな途中で下山してしまわっしゃりました。

老女　（頻りに聞き耳立てていたが）あの鳴り音は、何でござるの？

婆　されば、あれがソノ……

と言いかけた途端に、樵夫(きこり)らしき三十年輩の男、名はウシマリ、左の山手から急ぎ足で降りて来て、橋を渡るや否や、大きな声で

ウシマ　事じゃ事じゃ！　若いお行者どのが川へ陥(はま)らっしゃった。

姉　えッ！　若いお行者さんが!?

ウシマ　今朝もなア、例(いつも)の通り、アカズネやケズラと一しょに、おれも仕事為(し)に出掛けては見たがの、山鳴りで胆を潰し、七曲りから引返して、洞(どろ)の辻(つじ)まで来ると、上の瀬に、何やら白い物

が岩の間に挟まってだぶついているのが見えた。どうやらそれが人らしいので、おりて行って見たところ、案の定、人じゃ。人も人、去年山籠りした、あの都の若行者じゃ。

姉　えっ！　あの都の若行者さん！

妹　あの色の白い　目の涼しい……

ウシマ　そうじゃ、あの生優（なまやさ）しらしい若い男じゃ。

爺　はれ、まア！

婆

爺　いよいよ主さんが荒れだしたのじゃ。

姉　そうしてもう助からんかいな？

ウシマ　いや、まだ助かるかも知れん。少しは胸の処に温（ぬく）みがある。今アカズネとケズラが裸体（はだか）にして水吐せておる。が、息が出たからというて、ここまで歩ばせることは覚束ない。戸板でも一枚借してくっさい。もし生き返ったら、そっと臥（ねか）して吊って来う程にの。

婆　それならば、あの雨戸がえいわ。エブリや、はよ脱（はず）して持たせてあげいやい。

姉も妹も一しょに起ち上って、筧側（かけひ）の戸袋から雨戸を脱しにかかる。山鳴り全く止む。

爺　どうか助かればえいがのう。

老女　その都の行者とやらは、名は何という人でござるの？

爺　たしか何の広足さんたらいうた。何でも都のお歴々の息子さんじゃげなが、色恋の事で親御達と甚い争論をして、それが元で発心さっしゃったとやらいう噂じゃ。（この中に、娘らは雨戸を樵夫に渡す。）

ウシマ　では一寸の間借りて行きますぞや。生き返ったら、ともかくも、ここへ連れて来う程に、休ませて下され。（姉、何やら妹に耳こすりをする。）

妹　お母さ、わしらは往って見て来るぞえ？

婆　はよ戻って来いよ。

娘ら樵夫に従いて橋を渡り、左手、家の後ろへ消える。爺婆も思わず起ち上って娘らの後ろ影を見送る。

老女　（青虫に向い）定、その若行者というのは、あの韓国の連どのの秘蔵子に相違ない。親の心をば子は知らず、限りない心づくしの恩を仇に、五年以前家をば脱出して、きょうまでも何の便りもせず。母御はそれが為に泣き死。さてはこの山に籠っていたのじゃのう。

爺　（席に戻りて）お袋さまは、その広足さんの身寄りでもござらっしゃるかな？

老女　いやいや、今は何を包みましょう？　わしは役の行者小角の母でござる。

爺婆　えッ！　お前さまがや!?

老女　思い出せば、今から六十二年以前、わしが十八の時の事、癸(みずのと)の巳(み)の三月、天から独鈷杵(とっこしょ)が降って来て口中に入ると夢を見て、懐妊し、生み落したのがあの行者どのでござる。

爺　　はれ、まア！

婆

老女　名を小角と附けしところ、赤子の時から、凡人とは、面(かお)ばせも智慧も異(ちご)うて、十三の頃からは、誰に学ぶともなく、仏の教えを知り、十七歳で河内の国金剛山に登ったのが修業の始めで、三十八の年には、亡き所天(つれあい)どのの許しを得て、あの葛城の峰に分け入り、数々の苦行功積んで、嶮山魔所をも踏み開き、業通無碍(ごうつうむげ)の身となり、活き神と崇(あが)められ、諸人を済度(さいど)し、世間を利益(りやく)すると、伝え聞くは嬉しけれど、夫には早く別れ、頼る方もない老の身は、我子恋しくなつかしく憧れ泣かぬ日はござらぬので、いつしか目を泣きつぶし……

と堪えかねて泣き入るを、青虫いろいろ介抱する。爺と婆は呆れて聴いていたが

爺　やれやれ、活き神さまのお袋様さまじゃとは気が附かなんだ。あ、物体(もつうたい)ない、物体ない！

婆　物体ない、物体ない！　まアまア、こちへ上らっしゃりませ。まアまア。

青虫　あのように申しまする。ま、ともかくもお上りなされませ。

爺婆介抱して老女を席に着かせる。

老女　もう余命も永うはあるまい。せめて只一目、只一声、我子に逢うて最期の言葉を言い交して死にたいと、はるばると来て見れば、この山にはおらぬという。よくよく親子今生の浅いえにし。この上は、迚も土とならば、同じくばこの山の土となろうずる。やい、青虫よ、今ちょうどこの山に妖変があるこそ幸い、おれをこの山の奥へ負うて行き、いずこになりと棄て置いて去んでくれ。熊狼の餌食ともなって果てようわいのう！

と泣きくずれる。

青虫　それは余りの御短慮と申すものでござります。何の、いつまでもお帰りなされぬこともござりますまい。この家の主人に頼み残し、行者御帰山あらば、やがて知らすよう計らいましょう程に、まアまアお心をお取直しなされませ。

婆　そうじゃそうじゃ。天眼通のお行者さまじゃ。きっとお前さまのござった事も、山の主さんの荒れ出した事も、今に知って帰らっしゃりましょう。今日程は、なアお父さ。

爺　そうじゃそうじゃ。きょう程は堪えて帰らっしゃりませ。泊めてもあげましたいが、この通りのあばら屋、夜の物も余分にはない。蓑笠だけは借して進ぜる程に、雨にならぬうちに、里へ下らっしゃれ。のう、わるいことはいわぬ。そうさっしゃれ、そうさっしゃれ。

老女　いやいや、おれは帰らぬ。どうしてもこの山の土になるのじゃ。

青虫　その御決心でござりますれば、必ずお帰りとは申しませぬ。したが、この家では泊めぬと申す。お山へは登られず、雨は今にも降って来そう。ま、ともかくも最前の村までお戻りなされませ。その上でならば、屈強の者を雇うて、お伴いたさすことも出来ましょうず。ともかくも、一先ずお帰りなされませ。

爺　そうなされ、そうなされ。

老女尚おかぶりを振りつつ泣いている。

婆　やれやれ、憂(う)いことやの、憂いことやの。

爺　（物置から蓑笠を取出して来て）ささ、これを被(き)てござらっしゃれ。

青虫　（それを受取りて）かたじけない。いかい世話になりましたわい。……

尚おいろいろ棄てぜりふにて、三人かわるがわる老女を慰める。老女余儀なく、泣く泣く起き上る。

さらば。

爺婆　ご無事でござらっしゃれ！

主従元の路へ帰り去る。爺婆五六歩送って行って、なお立って見送っている。

と、そこへ娘二人「おとさ！　おかさ！」と姿を見せぬうちに嬉しげな声だけ先きへ聞かせて、ばらばらと駆け戻って来る。

妹姉　おとさ！　おかさ！

姉　若行者さんが助かったわいな。ああ、うれしやうれしや！

この中に、すぐその後から、先刻の樵夫ウシマリが先きに立ち、同じ仲間のケズラとアカズネが、雨戸の上へ一人の若い男を臥（ねか）して、吊り台を運ぶようにして運んで来る。やがて橋を渡って筧（かけひ）の此方まで来ると、

爺　それそれ、そこからすぐ床（ゆか）へ上げるがえい。……そうじゃそうじゃ。

一同手伝って、雨戸の上の男を筧の此方の框（かまち）から遣い上らせる。若い男、韓国の広足は、

齢二十七八、久しい荒行で、都人の昔の面影は無い程に、日にも焼け、やつれ果ててはいるが、容姿（かおかたち）は優美で、何さま貴紳（れきれき）の果かとも見える。白い行衣は、焚火などで乾かしたらしく見えるが、処々おそろしく裂け破れている。豊かな頭髪のまだ幾らか水に濡れているのを、細縄で端を結んで背に垂れている。

ウシマ　えいかな！

アカズ　あぶないぞな。

広足　かたじけのうござる。もう大丈夫でござる。もうようござる。

爺　さアさア、ここへ臥（ね）さっしゃれ、臥さっしゃれ。

広足　いやいや、もう大丈夫でござる。かたじけのうござる。かたじけのうござる。

炉の傍に坐る。家の者はみな席に着き、樵夫三人は框に腰を掛ける。

妹　なア、おかさ、あの人はなア、西谷をば覗かしゃって、それで怖い目に逢わしゃったのじゃげな。

婆　きっとそんな事であろうと思うた。（広足に向いて）十五年前の話を知らっしゃらんでも無かッつろうに、ま、ひょんな事をさっしゃったのう。

広足　（面目なげに）自分ながらわるいことをしました。

爺はこの間に何やら薬草を湯に浸して持って来る。

爺　さ、えい薬じゃ。ま、これでも飲んで、気を落着けさっしゃれ。

ウシマ　わしらの心得になるこっちゃ、気が落着いたら、詳しい話をして下され。

アカズ　そうじゃ、心得になるこっちゃ。噂にはたびたび聞いていたが、どこいら辺が魔所やら、おれにはまだ見当も附かぬ。

婆　どうして覗く気にならっしゃったのじゃ？　わしらでさえ知っているお行者さまのお禁断所じゃござらんかいの？

広足　さア、つい五六日前までは、夢にもこんな気はなかったのじゃ。師匠の行者どのは、先々月陸奥（みちのく）へ往かれる前にも、取りわけて予（わし）に戒めおかれた。「おれが留守になると、あの西谷の方で山鳴りがするかも知れん。併し、どんな事があっても、西谷へは入るな。万止むを得んことがあっても、前鬼と後鬼とが帰るまでは俟（ま）て。」とこう言いおいて師匠は出て行かれた。で、わしは、無論それに背こうなぞとは思うておらなんだのじゃ。ところが、この五日このかた、あの山鳴りが日増しに激しゅうなるにつれて、わしが思うたには、如何に師匠の吩咐（いいつけ）にもせよ、あのような不思議を正体も見届けんでおくというは不覚じゃ。ああして棄てておいたら、どう

いう間違いになろうも知れぬ。それに、前鬼や後鬼には、始終往来を許しておかっしゃる。して見ると、わしをば修業のまだしい者と見貶してござらっしゃるのに相違ない。くちおしいことじゃ。遠国へござった留守中の代役をする程のわしに、それほどの事が出来んとはあさましい！　村々の衆に聞かれても返答がならんようでは面目ない。日頃の修業は何の為じゃ？　こういう妖変を祈り伏せる為ではないか？　どんな難事でも、命懸けでするなれば、遂げられん筈はない、と思うて……

婆　ああ！　それでつい覗かっしゃったのじゃな。

広足　全くわしの心得ちがいであった。が、今の先きまでは、そうは思わず、けさの起きがけにもその事をば考え考え、いつもの通り、東の行場へ降りようとすると、例の山鳴りがいつもよりは激しゅう聞えて来たばかりでなく、気のせいか、獣の唸るような声が聞えたので、どうしても心が抑えきれず、ついふらふらとなって、西へ西へと降りて行くと、空が急に曇って来て、あたりには深靄が降り、とんとまア歩きつつ夢を見ているような心持。と、いつの間にやら、繁った大きな木が蔽いかぶさっていて、昼とは思えんような、昏い、物凄い溪間へ出ていた。はっと思うと、すぐ目の前に、大きな、十抱もあろうという上下八股の樟の木が横倒しのように生えていて、その股に何とも言えん怖ろしい――獣類だか、鬼だか、神だか分らん――者が横ねじれに挾まっていて、のたうっては呻き、呻いてはのたうつ。のたうつ度に、木も岩も地震のように震動する。その呻く声は冬の暴風のよう。……

と言いかける途端に、又も不思議な山鳴りが聞えて来る。

や！……

と広足は話を中止する。一同の顔色が変る。ややあって広足は話を続ける。

その怪物（ばけもの）を一目見ると、忽ち慄然（ぞっ）と摑み立てられるようで、恥かしいことながら、日頃の修行も何もあったものでなく、体じゅうがわなわなと震え出し、舌はこわばる、目は眩む、ここが（と両手で頭をおさえ）ぐらぐらと破（わ）れそうになって――さりとて手や脚は麻痺（しび）れてしもうて、どうすることも出来ん。そのうちにそいつが予（わし）にむこうて、怖ろしいことを言いかけおった。初めはそれを、只もう怖ろしいとばかり思うて聴いていたが、そのうちに、どうしてもこうしても其奴（そいつ）の言う通りにせねばならんような気持になり、つい半夢（なかば）中で、取返しのならん返辞をしたような気もするので、さア怖ろしゅうなって、死物狂いで逃（にげ）出そうとすると、その後ろから予の耳へ、そいつが三度浴びせかけおった怖ろしい呪い語（ことば）！　ああ、思い出しても身が慄える！　けれどもこっちも一生懸命、右とも左とも方角知らずに、岩をも木の根をも飛び越え、跳ね越えて、何町ほど駈けたことやら！　溪河の深みへ転げ落ちて気を失うたのも、自身では

一切知らなんだのじゃ。（身を慄わして）あんな怖ろしい目に逢うたことはない。

一同　（同感して）ああ！

婆　（娘らを見返り）な、それが一言主さんじゃがな。（皆々にむかい）いよいよお縛（ばく）が弛（ゆる）んだのじゃ。きょうからは油断がならんぞな。

山鳴りが次第に激しくなる。空が暗くなる。折々遠くで電光（いなびかり）がする。娘らは老人の傍へ寄りこぞる。

爺　（広足に向いて）では、何かその山の主さんと約束をさっしゃったのじゃな？……

広足うつむいたまま黙っている。爺は婆と顔を見合せる。

心得ちがいをさっしゃるなや。主さんが如何（どない）にあばれ出いても、つまりは行者さんには敵（かな）わん。行者さんの方が正道（しょうどう）じゃ程にのう。

婆　ま、それでも命を拾わしゃってよかった。

姉　ほんになア！

広足　全く皆の衆のお庇(かげ)で命拾いをしました。くれぐれもかたじけのうござった。（空を見上げて）や、おそろしゅう空が暗うなった。どれ、もうお暇(いとま)をしましょう。

ウシマ　お暇いうて、どこへ往かっしゃるのじゃ？

広足　山へ帰るのでござる。

婆　めっそうな！　その弱った体で、どうしてお山へ帰らるるものかな。それにもうやがて昼過じゃ。ま、飯(まま)でもくいなされ。

ウシマ　そうじゃそうじゃ。嘸(さぞ)ひもじかろう。よばれさっしゃるがえい。

アカズ　そうじゃそうじゃ。折角じゃ、よばさっしゃるがえい。

広足　いやいや、そうしていては、尚おと師匠に済まんによって……

この中にさっと颪(おろ)す風と共に、雨が激しく降り出す。電光がして、雷が鳴りはじめる。

爺　や！　とうどう来たわい！

婆　さ、濡れる濡れる。みんなこっちへ入らっしゃれ、入らっしゃれ。（広足に）こりゃ迚(とて)も帰らるるこッちゃござらぬぞな。……姉よ、それそれ降り込む。その雨戸を、それ、そこへ！……脊戸の方はえいかや？　エブリは脊戸を見て来いやい！　……さ、さ、みんな上らっしゃれ、上らっしゃれ。

雨風ますますはげしく、雷鳴ますます近くなる。

第二幕

第一場　大峰林中

向う一帯の蓊鬱（おうつ）たる密林。風、雨、電光、雷鳴。太陰暦九月十一日頃の初夜（八時）前後。右手（上手）からだしぬけに、河童の腰に毛が生えたのかと思うような身長三尺ばかりの怪物と金太郎に翼が生えているのかと思うような、肌の黄色い化物が、こけつ転びつして駆け出して来て、やがて左手（下手）へ逃（に）げ込む。つづいて同じく右手から一個の大きな怪物が、左右の手で二疋の奇異（ふしぎ）な妖怪を引立て「おどれ、うしゃアがれ」と怒鳴りつづけながら出て来る。

この大きな怪物は、よく見ると、慥（たし）かに人間で、男性であるらしく、齢は五十以上、頭髪は赤黒く、まるで棕櫚の毛のよう。おそろしく頬骨が立って、目の光が鋭く、乾固（ひかたま）ったような醜怪な顔色だが、兇暴には見えない。すべてが枯木のようになっているらしい。ほとんど裸体だが、粗布（あらぬの）の犢鼻褌（とくびこん）を締めて、腰のあたりは何か獣の皮らしい物を纏って、脊に

は岩畳な笈を負い、縄の帯には柄の長い古風な斧を挟んでいる。これが、第一幕で噂されていた役の行者の使わしめの前鬼なのである。引立てられている妖怪は、いずれも身長四尺位で、胴から上は、一足は男、一定は女、只の人間とさしたる相異もないように見えるが、よく見ると、男の方は面附（つらつき）がやや猿に近く、女は目が際だって大きく、目と目との間が人間より隔たっている。臍の辺から下は、二疋とも明かに野獣である。蹄の形なぞから見ると、雌の方は鹿かとも思われ、そうして色が飽迄も白いが、頭髪は全くの赤毛に近い。雄の方は足の恰好が猿に近い。以下、折檻される間、二疋とも物は言わないが、折々堪えかねると、まるで獣のような、又は唖が叫ぶような声を発して逃げようと蹠（もが）く。

前鬼　おどれ、たった二月の間ござらっしゃらんばかりじゃのに、もう御禁制（ごきんぜい）を破りおる。どうしてくれるか、見おれ、この極道めら！……

男女の妖怪は首ねっこを掴まれて、きゃアきゃア叫びながら、頻りに手を合せて前鬼を拝む。

やい、行者さまがまだござらっしゃらなんだ頃の、この山の事を忘れおったか？　あの親子の魔神やらが、ここいらじゅう一円を横領して、あばれ廻っていた頃には、やい、おどれらは如何（どん）

な目に逢うていた？

夜も昼も、――二六時中、年が年中、――あの親子に虐使(こき)われて、只の半時も休むことが出来なんだばかりでなく、それ、その体じゅうに、折檻の生創が絶えたことはなかったぞよ。（妖怪共をこずき廻すと、二疋とも悲鳴をあげて又頻りに拝む。）その怖ろしい苦みを誰のお庇で助かったと思う。この罰当りめ！　行者さまの大恩を忘れおったか、うぬ！……

手強く二疋を右と左へ突放すと、二疋とも一二間けしとんでへたばり、暗雲(やみくも)に米搗(こめつき)ばったの真似をしたり拝んだりしている。

が、今夜はもう一遍だけ堪忍してくれる。又とこんな真似をしくさると、何もかも行者さまに申しあげて、五十六億七千万年の間決して解くことの出来んお呪縛を受けさせるから、そう思え、ろくでなしめ！　失しょう！

赦免が出たので、二疋の妖怪は、一さんに上手へ逃げて入る。電光も雷鳴も止み、雨も止んで、あたりが寂(しん)となった。

前鬼は暫くその後ろ影を睨んでいたが

前鬼　お吩咐で、宙を飛んで駈け戻って来て見ると、案の定、これじゃ。魔神の葛城めが、お結界を破りおって、いつの間にか入り込み、何か食わせおったと見えて、一言主めはあばれはじめる、妖精共は怠ける、広足めはあのざま。今夜にも魔神が又来おるかも知れん。こりゃ大事になって来たわい。……（といいながら空を仰いで）やっと夕立が晴ったそうな。……

この途端に、左手（下手）から更に一個の怪物が飛び込んで来た。大体に於て、前鬼に似ているが、これは明かに女性らしく、やや長い棕櫚の毛を根元で束ねて、その末を結び垂れ、腰、股のあたりは前鬼同様だが、さすがに粗布の袖なしようのもので裸体を半掩うており、手には古風な大きな鐸を持っている。前鬼はこれを見返って

おお後鬼か？　どうした？

後鬼　何もかも行者さまが言わっしゃった通りじゃ。何さま、あの広足にゃ魔神めが魅入ったらしいぞや。あいつ、命を助かって、あの一軒家へ泊り込みおったその晩げから甚い熱病、やんがてその煩いは治ったなれど、それからというもの、だんだんと人柄が生れ変ったようになって、今では西谷を覗いたのを悪い事をしたと悔むどころか、まるで新しい悟りでも開いたかのように慢心し、毎日毎日あの界隈の者を集めて、説教をするやら、万病平癒の祈禱をするやら。まぐれ当りであろう、二三遍験があった。すると物知らず共が有難がり、とりわけ若い女子供

は、あの生白い顔に迷うて、やれ、役の行者様のお名代じゃの、活き仏さまじゃのと崇(あが)め立て大騒ぎをするので、あいつ弥(いよいよ)えい気になり、行者さまを蔑(ないがしろ)しろの増上慢。外道とはあのことじゃ。あの儘にしておいたら、行者道のどんな迷惑になろうも知れん。早うどうかせにゃなるまいぞよ。

前鬼　（しきりに首肯(うなず)いて聴いていたが）おれも今そう思うていたところじゃ。……よもや今夜じゅうに、西谷へ、魔神が入り込むようなこともあるまい。おれは宙を飛んで駆けていって、この事を行者さまに知らせて来う程に、おのしはもう一遍麓へ下り、もそっと様子を見届けて来い。……

後鬼うなずきて、すぐに元来た方へ行きかける。

おれの留守の間、西谷口の見張りも油断すなよ。

左右へ別れ、急ぎ足で入る。と局面が一変する。

第二場　西谷の魔所

大峰の一部、今の西(にし)の覗(のぞき)附近の深谷でもあろう。但し地勢は後に大変化があったために、著しく後世のとは異っている。

第一場と同日の夜半。

谷底から見上げると、右手も左手も削ったような千仞の絶壁である。右手の手前なぞは、その絶壁の頂きに樹木が繁茂しているため、実際空を遮ってしまって、高さの知れぬ六枚折を不揃(ふぞろい)に開きかけて立てたように、その巉々(ざんざん)たる岩角が出つ入りつ重なりあい、聳え立っている。ずっと離れた左手の絶壁の一部（即ち下手の前）は、余り久しからぬ以前に激しい山崩れがあったらしく、あちこちに大小の岩石が、樹木を圧(へ)し折って転げ落ちたまま、重なりあって、斜地(なだれ)を形成(かたちづく)っている。この斜地の頂きから溪へ臨んで、掩い掛かるようになっている樟(くす)の大木、幹は根元では十抱えもあろう、それが根から二尺ばかり上で四つ股になっており、更に三四尺上の処で又四つ股に分れて、東西南北へ会釈もなく、その長い、逞しい大枝を張出して、その一枝一枝がまた幾条にも分れ分れて当面の溪の上殆ど一ぱいに掩いかぶさっている。それからその手前や後ろにも、霜にはまだ間のある時候だけに、種々の木草が尚お繁っていて、曇天や雨天には、昼間でさえ夜のように暗い。まして真夜中の陰森さと言ったら無い。それが月夜だと崇高の気が加わって、一段と物凄い。

この崩れた断崖の彼方、大樟の幹の背後に当る処に、溪へ覗き込んでいるような岩山が突出していて、その裾は中へ刳(えぐ)ったような懸崖をなしているが、その岩山の辺に一道の山蹊

が通じているらしく、その頂きから右手の奥の、同じく溪の上へ突き出ている一大懸崖の頂きへ掛けて、天然自然の苔蒸した岩の橋が出来ている。この橋の左の袂は、大樟の梢やその他の樹木に遮られてよくは見えない。

前に言った左手の覗き込んだような岩山の附近は、杉や檜の老木が矗々（ちくちく）と並び立って空を摩しているが、その木の間（こま）越しにこの岩山に連亙（れんこう）している同形式の岩山が、一段高く一段物すごく聳えているのが見える。その断崖の裾を巡って、一道の溪流が白練（しろねり）を躍らすように、不規則にちらばっている怪岩奇石の間を縫って、うねりうねり、緩くなったり、急になったり、細くなったり太くなったりして、六枚折に比した右手の絶壁に添うて流れて来て、遂に右手々前の崖下へ流れ入ってしまう。この日は宵に夕立があったので、雨雲の余波（なごり）が尚おだらしなく迷っていて、青空はほんのその破間破間（やれまやれま）に覗いているぐらい。

遠くで草臥（くたび）れたように稲光りがする。と稍（こずえ）暫らくして、思い出したように、居眠りしながら廻している石臼のような雷が聞える。樹梢からは雨の雫がまだぽたぽたと落ちている。

樟の大枝の間からは十一日頃の落ちかたの月が――余程前から居残りの雨雲と煮切らぬ生存競争をしていたが――この時やっと顔を出した。どこでか不思議な鳥の声がする。それは妖怪国の笛の音ではないかと思うほど、聞きようによっては凄いというよりもおかしいとも感ぜられる一種奇妙な拍子を取って啼くのである。

夜は次第に更ける。風はまるっきり死んでしまった。谷中が闃寂（しん）としている。

と、溪の奥、斜地の向う、大樟の後ろに当って、人間界では誰も聞いたことの有りそうにない奇異な、大勢の笑い声が聞えたと思うと、斜地(なだれ)の裾を廻り、伸(の)し下っている大樟の枝下を潜ってばらばら、ばらばらと、その同じ奇異な声で笑いさざめきながら手と手とを繋ぎあって駆け出して来た者がある。見ると何れも奇怪不思議な、鳥に似て鳥でなく、獣に似て獣でなく、無論人間とは思われない、裸体の妖怪なのである。その中には前の場の二頭も加わっているが、別に三尺に足らぬ白髪頭の怪物と黒い長髪を脊に垂れた女の化物とがある。白頭の怪物は恐しく頭が大きく、鼻は僧正坊の如く、総てが老人のようで身長は二尺ばかり、長い、鼠のような尻尾を垂れて、よちよちしている。それから女怪は肩から腰へかけて、一ぱいに雉そっくりの羽毛が生えており、翼や尻尾はないが、脛や足は全くの鳥、相貌(かおつき)は存外に醜怪でない。皆如何にも嬉しそうである。

総体で六頭。浮れ出すと、僧正坊以外は、どれも鼷鼠(はつかねずみ)のように矯提(きょうしょう)に跳ね廻り飛び廻るので、時としては目にもとまらぬ。

この妖怪群は、手に手を取って、奇怪な笑い声を発して、嬉しげに駈け出して来たが、やがて人間のよりは禽獣のに近い音節で口をきき出した。白髪頭の僧正坊だけは口をきかない。さて手を繋ぎ合せて、緩く輪形に廻りながら、調子づいた声で

妖の一　はっってった！

妖の二　はってった！
妖の三　はってった！
妖の四　はってった！
妖の五　はってった！
妖の一　ぴいかぴいか、はってった！
妖の二　があらがあら、はってった！
妖の三　びっしょびしょ、はってった！
妖の四　ぴいかぴいか、はってった！
妖の五　があらがあら、はってった！
一同　（声を揃えて）びいしょびいしょ、はってった！　はってった！

不思議な拍子を取って、啼く先刻の鳥が、この間ちょっと鳴き止んでいたが、又頻りに鳴き始めた。妖怪共は、待っていましたという風に、滑稽な拍子に合せて、一種奇妙な輪形（わがた）舞踏（おどり）を、天井のように伸しかかっている樟の大枝の下で、はじめた。おまけに妙な節で歌めいたものを囀りはじめた。雲がやっと散じたので、月の光が冴えて来た。

のうこんだ、くうろんも！

ちんれんれ、ちれろ！
あっぱっぱ、きらら！
あっぱっぱ、きらら！
きらら！

手を繋ぎ合せ、脚で拍子を取って踊り跳るのだが、歌が切れると、怖しく足早に廻りはじめて

一同　（同音に）ぐるぐるせつこう！　ぐるぐるせつこう！　せつこうせつこうせつこう！

走り止(とま)ると、又同じ歌を囀りはじめる。この輪形おどりが三度ばかり済んだ途端に、全く出しぬけに、大樟の幹の近くで、一声高く――手負い虎なぞの吼えるような声で――物凄い呻き声がすると同時に、殆ど溪(たに)一ぱいの大樟がゆさゆさがさがさと揺れはじめ、続いて同じ呻き声が第二声、第三声、第四声と次第に高く、次第に物すごく連続して、そのたびに大樟の枝は勿論、その辺の樹木岩石までが動揺するので、自然とそれが界隈の山岳にも影響して、大げさに言うと、山鳴り谷応(こた)え、小さい地震のよう。これが為に散際になっている病葉(わくらば)や枯れ枝はいうまでもなく常磐木の葉さえも堪りかねて、小雨のように、ばらば

らと散りかかる、軋轢(すれあ)って折れるので、小枝ぐるみ落ちるのもある。最も激しくゆれている正面の樟の一枝が、急にめりめりと音がして幹の接続際(つけね)から圧折(へし)れると共に、呻き声の本体が露(あら)わになった。大樟の第二の四つ肢がその真中で真ッ二つに裂かれてあって、その間に、横捻(よこねじ)れに身長八九尺もあろうという一個の怪物が、無論裸体で、挾まれているのである。面(かお)は――長い赭(あか)黒い頭髪を獅子の鬣(たてがみ)のように振乱し、それが鼻といわず、目といわず乱れかかっているので――よくは見えぬが、何でも怖ろしく醜怪な併しながら偉大と感ぜられる類いの相貌であるらしい。太い、藤の幹のような右の腕では、つい今圧折った一枝のすぐ傍の大枝を引ッ抱え、なおその面の上の大枝を掴もうとするかの如くに、頻りに右の手を働かしている。胴は幹に挾まれて見えない。上半身は人間と異なっているとも見えぬが、銀色の蹄を月の光りに反射させて四下(あたり)の小枝を蹶散らしている太い毛むくじゃらのその片脚は、野牛か野猪かの脚に似ている。これは三十年前まではこの界隈の主であった一言主という獣神(けだものがみ)なのである。最初は只呻くのかと思ったのが、次第に意味を伝える音節(ことば)となって来る。はじめて唸声が一声聞えた時に、踊り廻っていた妖怪共は、猫の一声に活動を中止する鼠のように愕いてぴたりと立止まったが、二声目を聞くや否や、一斉にけたたましい叫び声を発して、忽ちばらばらと四方へ逃げ散った。獣に似た、やや大きな二頭だけは、大枝が折れて落ちた時までも遠くへは逃げようともせず、頭を抱えて、手近の岩かげに蹲踞(うずくま)っている。

一言主　ううん！　ううん！……阿母(おんも)よう！　阿母よう！　帰って来う！　速う帰って来う！
……血がほしいわい！　ひもじいわい！　くるしいわい！……ううん！　ううん！

蹲踞(うずくま)っていた妖怪が岩かげから這い出して来て顔を見合せ、首をすくめ肩をそびやかしていたが、急に前へ飛び出して来た。

妖の一　いひひひひひ！
妖の二　いひひひひひ！
妖の一　ほッえれえい！　ほッえれえい！　いひひひひひ！　意(い)ッ地(じ)なしい！　ざッまア見れ！　いひひひひひ！
妖の二　ほッえれえい！　ほッえれえい！　いひひひひひ！　力なッしい！　ざッまア見れ！
いひひひひひ！

一言主の挟まれている真下(すぐした)を、歯をむき出して見上げながら走り廻る。それを見おろして、睨みつけて

一言主　やかましいわい！……

雷霆（いかずち）の如く一喝すると、妖怪は吹き飛ばされたように一間ほどもけし飛んだが、次ぎの長い呪の間に、又そろそろ這い出して来る。前に逃去った他の妖怪らも、幾ら叱られても平気な頑童（わんぱくもの）という見えであちこちの岩かげ又は叢（くさむら）から首を出入させて、歯をむき出し、折々奇異な叫び声を発して、兄分の妖怪に声援をするが、「やかましいわい！」の一喝に会うと、急にまた姿を没する。

うじ虫めら！　新入りのうぬらまでが見下げやがって、おれを病みほうけた獅子か虎のように扱やがる。今に見ろ、自在力（じざいりよく）を取返しゃア思い知らしてくれるぞ！　三十年前なら、うぬらが覗くことも出来ん山だぞ、ここは！……ううん！　ううん！　……行者が何だ、行者が？　たかが老いさらぼった人間だ。その老いぼれに縛られたこの態（ざま）は何だ？　このざまは！　ああ、この五体に充ち満ちて、はちきれるようになっていた強い力は何処へ去（い）った？　おれの若い強い力は？　どんな岩山の肋骨でも、肩骨でも、おれがうんと息張って踏む力足には、おッぴしげて、みじゃけて、菌（きのこ）の笠のようにおッぴらいたものだ！　……ああ。あの弥（いや）が上に生い茂り生い延びる草や木の若い夏は何処へ去った？　ああ、若い臭いで噎（む）せ返る青葉の夏――ああ、強い、逞しい。生々した、燃え熾（さか）る夏はどこへ去った？　霆（かみなり）はきさまのをめく声だ。稲妻は

きさまの眼の光りだ。きさまは岩石をも煮爛らし、大地をも焼き割る。きさまは永劫の熱、永劫の力、永劫の若さだ。それがきさまだ。きさまはおれだ。ああ、その若い、逞しい、あぶらぎった夏は、もう往ッちまったか！　あれからもう三十たび目の夏が往ッちまった！……ううん！　ううん！……うんにゃうんにゃうんにゃ、おれは今でも夏だ、今でも夏だ。それだのに、それだのに、たかが老いぼれの人間めが、忌々しい符呪（まじない）を工夫しやがって、おれのこの強い力を縛り、おれのこの若い命を圧し殺いて、昼三度、夜三度の猛獣の生き胆をさえ食わせやがらん！　なぜおれを苦めやがるんだ？　なぜおれを？……ううん！　ううん！……おれがどういう悪い事をした？　おれに土鼠（もぐら）にも劣ったあさましい仕事を吩咐（いいつけ）けやがった。それをせなんだのが、何がわるい？　おれが何をした？　何がわるい？

妖怪共がまた枝の下を走り廻る。

妖の一　飲ンむなッてッた獣類（けだもん）の生血飲んだわ！　いひひひひひ！

妖の二　食うなッてッた獣類の汚穢（きたな）ッ物（もん）食ったわ！　いひひひひひ！

妖の一　阿母（おんも）を牝（めん）にしてまッぐわったわ！　いひひひひひ！

群妖　（一斉に）まッぐわった!!　まッぐわった!!　まッぐわった!!　いひひひひひ!!

一言主　やかましわい!!

妖怪共飛び退く。或者は叢へ逃げ込む。

食わんでおられるか？　飲まんでおられるか？　まッぐわったが、何がわるい？　それは獣（けだもの）神（がみ）の持前だ、堪えられんことだ、せにゃならんことだ。……ううん！……ううん！……飲むと食うとは命を燃やす薪だ？　まぐわえばこそ俺が二倍にもなる。大きくなる。高うもなる。十倍にもなる。百倍にもなる。千万倍にもなる！　ううん！　阿母（おんも）とまぐわったが何がわるい？　阿母と妻（いも）とを別にするのは人間の猿智慧だ。おれは神だ。神仲間には牝牡（めんおん）はあるが、阿母も妻も姉も妹（おと）もない。主（しゅ）もない、家来もない。きのうの他（ひと）の物が、きょうはおれの物だ。たれかれの差別は無い。無いのが自然だ。それが天然の掟だわい、蛆虫めら！　うぬらは精霊（すだま）に生れやがった癖に、意気地もなく行者めに虐使（こき）われて、前鬼や後鬼にすら虐使（こき）われて、食いたい肉も能う食わんで、枯れ蕨（わらび）のようにしなびやがって、時々の盗みまぐわいで、やっと乾枯（ひから）びた子種を蒔く。意気地なしめ！　木や草に堕ちッちまえ。石や土になッちまえ、うじ虫めら！　かりにも神になろうとするなら、おれをまねろ俺を、うじ虫めら！

妖の一　力なッしい！　意ッ地なしい！　それッほどえッばるおンのしが、あんでんに負ッけッた人間に？　あんでんに負ッけッた人間に？

妖の二　さやア？　さやア？　あんでんに負ッけッた？

群妖　（一斉に）さやア‼　さやア‼　あんでんに？　あんでんに？　いひひひひひ‼　いひひ

ひひひひ‼

一言主　やかましいわい‼

と叱咤ったが、覚えず火でも吐き出すのかと思うような苦しげな大息をついて

おれは生り出でん前の定命で、昼三度、夜三度、猛獣の生き胆を食った上に、年に二度三度、月の輪が円うなりはじめて全円になるまでの中一旬の間に、必ず一度あの猛獣の、七つ子の、その中央の牡の子を、孕み子のうちに生きながら取り出いて生き血を吸わねば、持前の通力が枯れてしまうのだ。……ううん！……それを見抜きやがったあのおいぼれめ、この山へ移る前に、先ず四方七十里の間を行力で結界し、剰えおれには大切なあの猛獣を海の彼方へ逐ッ払やがったので、おれの通力の根が凍えて、あらがうことが出来なんだのだわい！……ううん！……阿母の葛城も危かったのを、業通でやっと逃れて、行者めがこの山を離れる時があると、前鬼や後鬼の目を盗んで七十里の彼方から、時々猛獣の生き胆を持て来てくれる。餌食さえあれば、元気が十倍する。きょうこれだけの力が出るのは此間の阿母の賜だ！　……ああ！　飲みたい、飲みたい、あの獣の七つ子の牡の生き血が！　中の孕み子の生き血が！　もう十五年の間飲まん！　阿母の業通でも、海の彼方から、あの得がたい七つ子の中央の孕み子を、生か

しては持って能う来ん。……ああ、おれの力は、もう枯れ萎れてしまった！　もうこの一枝さえ圧折ることが出来んか！　ううん！　ううん！

樟の一枝に手を掛けて圧折ろうとしてゆすぶるが、中々折れそうにもないので、頻りに呻く。

妖の一　自儘為(じままし)イッた罰(ばツ)ちだ、まがもんめ！　とッととわッびッれい、とッとと！　行者に！　とッとと！

妖の二　さやア！　さやア！　わッびッれい！　わッびッれい！　とッとと！

群妖　（一斉に）さやア!!　さやア!!　わッびれッい!!　わッびれッい!!

一言主　えい！　人間なんぞにわびるものかい！　どんな苛責(かしやく)をしやアがろうと、昼千度、夜千度おれのこの五臓六腑を熱鉄の嘴を有(も)った鷲や角鷹(くまたか)に啄(つつ)かせやがろうと、おれの骨々節々を、一つ一つに截ち割って、昼千度、夜千度、永劫に冷めん煮え鉛を注ぎ込みやがろうと、何の人間なんぞに詫びるものかい！　今に見やがれ、あの老いぼれ！　おれが今に、あの孕み子の生き血をば飲むが最期、おのれ八つ裂きにしてくれるわ！

枝を掴んでいる手に満身の力を籠めると、それがぴしぴしと音を立てて折れかける。妖

怪共は、一斉に頭を抱えて逃げ出す。途端に一言主は辛うじて折取った一枝を横抛(な)げに抛げおろす。又も木の葉の雨。妖怪共はわっといって、左右前後へ逃(に)げ込む。暫くは山鳴りが止まない。

一言主　ううん！　ううん！

この必死の努力の為に、さすがの獣神も、精力が全く尽きたと見えて、ぐたりと疲れ弱って、手も脚も死人のようにだらりとなり、今は唯力無げに呻くばかり、その声さえも段々弱って行く。月がいつの間にかずっと異った方角で照っている。拍子を取って啼く怪禽の声は全く聞えなくなった。

と、向うの岩橋の右の袂へ、突然一の怪しい黒い影が躍り出でた。遠くからは二尺ほどに見えるから猿かとも思うが、人らしくもある――長い長い頭髪をおどろに振乱した――裸形の怪物、右の手に何物かを提げて、橋上に突立ち、暫く此方を窺っていたが、忽ち左手の岩山へと飛ぶが如くに横切った。と、一陣の怪風が満山の樹梢に渡って、又一しきり山鳴りがすると同時に、左手の斜地(なだれ)の上、大樟の根がたの処へ突如として一の妖怪が現れた。面も、太い逞しい、腕も、大きな、はちきれそうな、引締った乳房を突出させた胸元も、悉く黄ばみを帯んだ――この時は月に照らされて蒼白く見える――裸体の、但し胴から下

はまるで赭熊(しやぐま)のような黒赤い、粗い毛で包まれ、その太い、逞しい両脚までが全く熊としか思われんような一妖怪。赭黒い丈(たけ)程の頭髪を地に引摺る位いに振乱している。慥(たし)かに女性である。眼はすさまじく大きく、口も若し一ぱいに開いたなら耳元近くまでも達(とど)こうという、併しながら強(あなが)ち醜怪とばかりは評しにくい。どことなく一種崇厳な聯想をも起させる一妖怪。右の手には人間のか獣のか不分明の、生れたばかりの赤児らしいものの頸すじを掴んで掲げている。

女怪　かわいいかわいいあが子のあが夫(せ)よう！　嘸(さぞ)な待ッつろうなア！　今宵こそ、今宵こそ、持って来たわ。これ、ここへ持って来たぞよ。さ、はよう飲め、この生き血を。はよう啜(すす)れ、この生き血を。

と言っても、獣神は唯力無げに呻くのみである。

どうした？　どうした？……

女怪は頻りに気を揉むらしく、つるつると樟の幹を伝って一言主の挾まれている四つ股まで攀じ登って、仰向けになっている獣神の上へ掩いかぶさるようにして

これやい、どうしたんなア！　どうしたんなア！　あが夫のあが子よう！　かわいいかわいいあが子よう！　孕み子を持って来たぞよ。さ、これを啜(すす)れ、この生き血を。おのしが助けたいばッかりに、海を渡り、山を越え、西へ百里、北へ百里、往きつ復(もど)りつ六百里のこの間を、おれは飛ぶがように駈け廻って、捜(さが)いて捜いて、捜いて捜いて、ようやっと手に入れたコレ、この、例(いつも)の獣の七つ子の中の孕み子。この血を啜りさえすれば、おのしは直に元通りになる。神通力(じんずうりき)が取返される。さ、はようさ。

一言主　ううん！　ううん！　はよう飲ませてくれい！　はよう！

女怪は孕み子の胴を左の手で掴んで、更に右の手をこの上に加え獣神の仰向いた口の上へ臨ませて、力を籠めて一つ絞ると、下では大きく口を開く。生き血がその中へ注ぎ込まれる。と、どうしたか獣神は忽ち噎(む)せ返り、のたうち、虚空を摑み、呻きおめき、大苦悶を始めたので、女怪は身も世もあらぬという風に、狼狽し、持っている孕み子を放り出し、哭(な)きわめきつつ介抱する。

女怪　おほほほほほ！　おほほほほほ！　どうした！　どうした！

一言主　ううん！　ううん！　……今飲まいたのは――ううん！――生き血ではない！　死ん

だ血だ！　腐った血だ！……ううん！……毒がある！　毒がある！　臓腑が煮える！　腸(はらわた)が燃える！　骨々が割れひしげる！　……ううん！　ううん！（呻く声が段々弱って行く。）

女怪　えッ！　生き血でない!!　腐っている！……

女怪は身を翻して四つ股から飛び下りた。

落ちている孕み子を拾い上げて、きっと月光に透して見たが、忽ち失望と憤怒と悔恨とに堪えかねたらしく、切歯(はぎしり)して孕み子をはたと抛げ棄て、五つ六つ地鞴(じだんだ)を踏んで

無念や無念や無念や！　無念や！　こよいこそはと、この長い頭髪(かみのけ)で、幾重にも幾重にも、掩うて庇うて、庇うて掩うて、掩うて庇うて来たんじゃが、一夜は潮風に吹き曝(さら)し、二日二晩は山霧、野風に曝いたので、大事の大事の七つ子の中の孕み子が、絶え入ってしもうたか！　死んでしもうたか！　腐ってしもうたか！　通力を取返すことが出来ん計りか、腐った血がおのしの臓腑へ沁み入って、おそろしい毒となったか！　殺しもせず生かしもせん煮え鉛のような毒となったか！　おほほほほほ！　悲しや！　悲しや！　おほほほほほ！……

又も樟の幹の上へ猿のように身を翻して跳ね登って、苦しみ蹌(もが)く獣神を介抱し、頬摺をするやら、接吻をするやら。

おれが今吹き込むこの息で、もとのようになってくれ！　……強うなってくれ！　……強う！　……強う！　……

おめき叫ぶ声が次第に鳴咽（むせびなき）と衰えて行く。その悲しげな号泣に山も谷も森も流れも反響して、何とも言えない凄い寂しい山鳴りがする。木の葉の雨が又降りかかる。地平線から又黒い雲が沸き出して来て、いつの間にやら岩橋の遙か下に落ちかかっている月影が昏くなる。

物を言えい！　物を！　おほほほほほ！　おほほほほほ！

この時獣神は、力なく垂（ぶら）下げていた手足を、又少しく働かせて呻き出した。

一言主　ううん！　ううん！　ああ、あれから夏はもう三十たびも往ったり来たりしたのに、おれのこの身体は自由にならん！　この苦しみは止まん！　……もう何十たび、何百たび、こうして夏が往ったり来たりするか分らん！　いっそこの息の根が止ってほしいわい！　いっそこの息の根が！……なぜおれは死なれん！　なぜ死なれん！　ううん！　……ああ、人

間が羨ましいわい、人間が！　人間には何一つの長所(とりえ)もないが、われとわが手で死なれるのが、羨ましいわい！　死のうとしても死なれんように生(な)り出でた神の身が怨めしいわい！　命を絶つことの出来ん生を享けたのが怨めしいわい！　……どうしたら故(もと)の身に戻られるか？　いつになりゃこの苦しみがなくなるか？　ああせめては自由であった昔を思い出さずにいたいわい！　思い出す力が怨めしいわい！　……ううん！　臓腑が煮える！　腸が燃える！　骨々が割れひしげる！　……ううん！　自由になりたい！　自由がほしい！　阿母よう、どうかしてくれい！　助けてくれい！　阿母よう！　……ううん！　ううん！

又も声が次第に弱って行く。

女怪は狂気のようになって、又も斜地(なだれ)へ駆け下りた、再び溪の上へ躍りおりた。そうして身もだえして走り廻り、先刻抛げ棄てた孕み子を拾い上げて、又も月光に翳(かざ)して見たが、悔(くや)しげに切歯し、身をふるわせ、それを右の手に摑んだまま、揺かに岩橋の左の岩山を睨み上げて、空洞(うつろ)な物凄い声で詛(のろ)いはじめた。月はいつの間にか落ちてしまった。だしぬけに電光が閃く。暫くして雷が鳴る。

女怪　おれの通力で絞り寄せられるこの山、あの山の土の毒、沼の毒、木の毒、水の毒、彼奴めに、あの行者めに取ッ着いてくれ！　業(ごう)が尽きて死にかかって、とぐろを巻いたままで腐っ

て行く、蟒蛇(うわばみ)の毒、蝎(さそり)の毒、蝦蟇(がま)の毒、ありとある疫(えやみ)の毒、たった一滴(たら)し沁み込めば肺の臓をも心の臓をも腸をも腐らせ爛らせる毒の液(しる)、あの行者めが一つ一つの毛穴から五臓六腑に沁み入ってくれい！　骨を割いて髄を抉(えぐ)って、彼奴の寿命の続く限り、昼千度、夜千度、死なせもせず、生かしもせんで、渦を巻くようにのたうたせてくれい！　苦ませてくれい！　憎いや！　憎や！　憎や！　憎や！　……あの葛城の金剛山、この大峰の金峰山(きんぷせん)、大天井、小天井、此界隈の峰という峰、谷という谷、森という森、河という河、泉という泉に住む精霊(すだま)共に、神代このかた総主(そうぬし)と崇められて、日本八百万神(まんじん)の随一と拝まれていた親子じゃのに、それじゃのに、あんな老いぼれの人間めに呪縛(まじな)われて、（一言主呻き苦しむ）あのざまは何じゃ！　あのざまは?!　……神と生り出たおれが、人間に敵とうことが何故出来んか?!　なぜ出来んか?!

女怪は苦しげに一声叫んで、抛げ出すように臥し倒れ、地を掻きむしり掻きむしり、石といわず、土といわず、摑んでは抛げ、摑んでは抛げ、転げ廻って悶え歎いていたが、又すっく立上った。

おお、おろかや！　おろかや！　おろかや！　迷うていた！　迷うていた！　……この世界に生きとし生ける者で、うぬが身を大切にせない者があるか？　わが命より他の命を大切に思う者があるか？　いやいやいや、生きる力のある限りは、おのれを立て、おのれを張るのが自然

の定めじゃ、何じゃ？　おのれを捨てて他を救え。おのれが片腿を切り殺いで他の飢えを救うてやれ？　え、それが直しいことじゃ……え、それが正しいことじゃ？　せにゃならんことじゃ？　……あの老いぼれの行者めが衆生済度ということを口実にしおるのに釣り込まれて、おれも同じに、この下界の皮膚に生いた虫けらの人間めらを利益するのを、この上もない事と思うていた……おお、だまされたわ？　だまされたわ？　何の何の、それがせにゃならぬこと？　みんな臆病な人間めが強い者を防ぐ為、おのが身を庇うために、猿智慧で工夫し出した自儘の掟じゃ。おお、だまされたわ？　だまされたわ？　おろかにも、善い神、正しい神、直しい神と、取るにも足らん人間に拝まれたという未練気があったりゃこそ、憎い憎いと思うても、思い切ったことを能うせなんだ……悔しいと思うても卑怯いことや残酷いことを能うせなんだ。……おお、おろかや！　おろかや！　迷うていた！　迷うていた！　……善や慈悲は、自分の都合で人間めが築きおった狭い狭い脆い脆い桟橋じゃに！　広大無辺な、暗の夜の沙漠のような魔界には、道もない、涯もない、ああ、なぜおれは魔王になろうとは思わなんだぞ？　天上天下、我れ以上に何物もない魔王になれば……

怖しい表情をして岩山の方を睨みつけた。一言主がまた苦しげに呻く。

あの行者めが生きておる間は、人間めが我意を振いおる間は、かわいいかわいい我子のあが夫

が、あのような苦しみをする！　おお！　あのような苦しみをする!!（又覚えず泣き倒れんとしたが、忽ち奮然と躍り上って）むむ！　今から直に越の地獄谷の火焔の泉に身を浸いて――煮え返り沸き返り、七色に燃える火焔の淵に――きょうから七七日の間、夜千度、昼千度、身を黒焦げにくすぶらいて、生き身のままに死に返り死に返って、神変自在の魔王となろう！　むむ！　まずあいつらを血祭りにして、人間の子種を絶ってくりょう！

だしぬけに電光が閃く。一言主また呻く。女怪は覚えずその方へ駈け行こうとしたが、先刻抛げ出した孕み子を蹴付け、立ちどまり、きっと見て拾い上げる。又電光。女怪は無念げに孕み子を見つめていたが左右の手でその両脚を掴み、さっと引裂く。血が滴る。又電光。一言主た呻く。暫くして雷鳴がする。

第三幕

第一場　大峰の山中

ここは山上が岳に近い大峰の山中なので、向う一面は山に間近な山林。ここに樵夫ウシマ

リとアカズネとが、斧を持ち、山仕事の合間らしく、岩角に腰を下して休息している。時は陰暦の十月下旬である。

ウシマ　ほんまに、あらたかなもんじゃのう。あれほどの山鳴りが、まるで嘘のように鎮まってしもうたわい。

アカズ　魔でも何でも、行者さまのお行力にゃ敵やせんわい。早いもんじゃ、お帰りなされてからもうかれこれ二十日ぐらいになるのう。

ウシマ　そうじゃ。きょうでちょうど三七日じゃ。行者さまは、つい彼日から、あの絶巓の岩穴の中で、お行をしてござるんじゃげな。

アカズ　それにお使わしめの前鬼さんや後鬼さんも帰らしゃったというから、もうこれからは安心じゃ。鬼に鉄棒ではのうて、活き神さまに鬼じゃ。

ウシマ　同じお弟子でものう、あの生行者のような奴もあるから、油断がならんわい。

アカズ　広足の和郎か？　（ウシマリうなずく。）あの生白い面附が、初手から気にくわんかったが、案の定、とうどうあの一軒家の姉娘をまじくないおったというわい。

ウシマ　いまいましい和郎じゃ！　何にせい、ちょっと見たところが仏々しているによって、十人が九人までは瞞着られるわい。あの畦主のお嗅も嘗められたというが定かや？

アカズ　かも知れん。あんまり評判がわるいので、彼奴も尻こそばゆなったと見えて、けさがた

急にお山へ帰りおったげな。活き神の行者さまじゃ、よもやあないな奴、お弟子にしておかっしゃろう筈はない。やんがて又麓へ追いおろされて来やがろう。したら思うさま叩きこらいてくりょう。

ウシマ　それがえい。それがえい。つい長休みしてしもうた。お互いに倍増しの稼ぎをせにゃ、此間じゅうの埋合せがつかんわい。さア、出掛きょうかい。

二人が立上る途端に、下手から都の武官、従卒数名を引連れて出て来る。その時代の警察官なのである。

武官　まてまて。

ウシマ　へいへい。

アカズ　へいへい。

武官　汝（きさま）らは洞川村の樵夫（きこり）か？

アカズ　さようにござります。

武官　最前から汝（きさま）らの行くえを尋ねておった。役の行者が行をいたしておるとか申す山上の窟（いわや）へ案内をせい。

ウシマ　へいへい。

アカズ

とは言ったが、もじもじしている。

武官　早くいたせ。

アカズ　（おそるおそる）恐れながら、仰せ附けではございますが、行者さまのお行場へは、出入は御禁断でございまするによって……

ウシマ　へいへい、並の者は参られません！

武官　黙れ！……並の者は参られんでも、予は、恐れ多くも、飛鳥の朝廷の勅命を承わって、妖僧役の行者を召捕りの為に相向った討手の頭人じゃ。

ウシマ
アカズ　ひええ！

武官　役の小角師弟、多年邪法を修し、頻りに愚民を惑わし、財物を貪り取る由、予てより朝廷に相聞えおったが、近年に及び、彼れ悪心増長なし、日本国を魔界となさん手始めに、恐れ多くも帝を調伏し奉るという事、訴人の者日を追うて頻りなれば、勅命を承り、実否を相糺しに参ったのじゃ。彼奴邪法を自在にし、妖魔鬼神をも駆り使うとか申せども、何程の事があろう？　普天の下、率土の浜、王土にあらざる処なければ、万が一にも取逃さぬ。已に八方に組み子を配置り通路は悉く断ち切ったわい。……速かに案内せい。

ウシマ
アカズ　へいへい。

武官は樵夫二人に案内させて上手へ通り抜ける。

第二場　山上ヶ岳の岩窟

見下すと、忽ち目くるめきそうな、何百丈とも深さの知れぬ深い壑（たに）に向って、天然自然の半懸空式（はんけんくう）（柱なし崖造り）の城郭ともいうべき如くに、今にも落ち掛かりそうに、峨々たる岩山の一部が、ぬっと突出ている。処は山上ヶ岳の一角。見渡す右と左には、目近く万仞の絶壁が、崔嵬（さいかい）として天空に冲（ひい）って聳え立ち、正面のやや上手寄りには、極めて奇怪な形状の、滅法巨大な、殆ど小山ともいうべき大岩が、所謂崖造り柱無しの城郭の天守台ともいうべき見得で、これまた今にも倒れかかるかと思われる恰好をして断崖に臨んで嶄然と屹立している。さて、その大岩の裾は、突兀鱗絢（とっこつりんしゅん）と、不規則な、いかつい波形をなして、手前の方（舞台の前面へ）と蟠蜿（ばんえん）し、その一部は六畳敷程の窟（いわや）を形成（かたちづく）っている。窟の上手寄りには、一旦登って又向うへ降るようになっている。半ば天然、半ば人工の加わった石磴（いしだん）があり、又大岩の向うの裾に沿うて左手（下手）へは、天然の岩の胸壁や岩の櫓が更に突兀（とっこつ）と並び聳えて、その胸壁の尽くる処に、何百年間風雪に窘（いじめ）られてちぢこまり、ひねくれた脊の低い老松が高く低く二本深谷に向って生えていて、そのすぐ手前に麓への通路がある。それは、見るから如何にも嶮岨そうな、危なそうな降口（おりくち）で松の根がたに太い藤かずらが結

び附けてある。これは昇り降りの便宜にとで、人が加工したものらしい。一体に樹木は甚だ少ない。ひねくそた脊低の老松と少しばかりの灌木があちこちに生えているばかりである。

窟(いわや)はその地盤が平地よりはやや高く、総高さ一丈位い、入口の高さは、やっと五尺ぐらい、間口は不規則にだらしなく拡っていて二間余り、奥行は一間半ぐらい。奥へ入ると天井が低くなっている。

千仞の断崖の向う、渓谷を隔てた真正面には、大天井、小天井の二峰がにょっきりと屹立し、なおその左手には、他のやや遠い山々が見えている。窟の内部、やや奥に、浄衣を被て、角帽(すみ)子をいただき、手に金剛杵(こんごうしょ)を握って、殆ど石の像かと思うほどに、寂然と瞑目して、結跏趺坐(けっかふざ)しているのは役の行者である。齢は六十位いだが、頭巾の底から見える頭髪や長々と延びている鬚髯は雪のように白い。が、身心共に剛健であるらしく、骨格は逞しく、筋肉は引締り、見るから如何にも矍鑠(かくしゃく)として日にやけた顔の色は壮者の如く赤らみを帯んでいる。

行者の背後の岩壁は、ちょうど肩の処で、龕(がん)のように穿ち凹められ、そこに二尺ばかりもあろうと思われる弥勒(みろく)菩薩の青銅の像が安置してある。それから行者の膝の前には小さい鉄の香炉があって、香の煙が細々と立昇っている。窟の一隅には行者の錫杖(しゃくじょう)が立て掛けてあり、その脇には鉄歯の木屐(げた)が方寄(かたよ)せてある。

窟の上り口の取附近く（平舞台）に、斜に行者の方へ向いて手を臍下に結び、頭を垂れ、端坐している若い男がある。韓国の広足なのである。水に溺れた時とは異って、肉附もよく、色艶もよくなり、頭髪は梳って都風に結び、冠り物をいただき、一剣を佩び、都紳士らしい服装をしている。既に久しく、端坐していたらしい。時は十月下旬で、時刻は午後三時過である。森閑として鳥の声さえも聞えない。広足は、ちょうどこの時首を挙げて晷を見、さて行者の方をも見たが、やがて、膝を進めて、恭しく平伏し、徐かに口を開いた。

広足　お聖行中を驚かし申しましては、相済みません儀にございますが、先刻も申しました通り、都へ出立の時刻が、已に相逼っておりまする故、失礼を顧ず、このたび上洛と決心いたしました仔細を、只今申しあげます。何とぞお聞届け下されませ。……その以前に、謹んでお詫びを申さねばならぬことがございます。先だって、陸奥への御不在中、お留守居を承りおりまして、きっとお吩咐を相守るべき筈でございましたのに、一旦の心得ちがいから、うかうか御禁断の西谷へ足踏みをいたし、それが為に、あわや一命をも失おうといたしました不覚の段は、幾重にもお詫びを申しあげまする。何とぞお宥し下されませ。……しかし、聊か申しわけの一端とも存じますることがございます。水死を免かれましたその当晩、さる農家に一泊いたしました処、忽ち大熱を発し、枕を能挙げませぬ十余日間の身神悩乱中に、図らずも一大妙光に

接しまして、心眼頓(とみ)に開けはじめて尊師の御ン教えに体達すべき自得の一路をば発明いたしました。すなわち、その日より、界隈の者を集め、教化(きょうげ)を試みまする傍ら、加持祈禱をもいたし遣しました処、効験いちじるしく、僅か一月ほどの間に、難病平癒、懺悔改心の者数を知らず、畢竟(ひっきょう)これは、尊師の御余光ではござりますれど、何卒これを一つの功に前過(あやまち)をお赦し下されますよう、ひとえに願いあげまする。さて、それにつき、更にお願いがござります。うけたまわりますれば、今や都の風俗は、上下(しょうか)共に甚しく乱れ荒(すさ)び、これを教え誡むべき道師とてもなく、剰(あまつさ)え、近来悪疫流行し、病める者已に百人千人に及びますれども、これを癒す妙薬なく、加持祈禱、楔(みそぎ)、大祓(おおばらい)も何の験(げん)なく、斃るる者日(ひび)に加わり、物体なくも飛鳥の帝(みかど)まで同じ御悩(ごのう)に罹らせられ、すなわち全国に勅令して、洽(あまね)く治癒の霊法を求めさせらるると承り及びまする。つきましては、わたくし未熟にはござりますれども、尊師のお名代として上洛いたし、第一には主上の御悩を平癒させまいらせ、第二には下万民の身心(しんじん)二つの大患をば相救いたいと存じまする。何とぞ暫時のお暇を下しおかれませ。……

こういって更に、恭しく平伏したが、何の答えもないので、暫くして又顔を挙げる。

まだお行が果てぬと見える。……

と独り語を言って、考えていたが、又一揖して更に語を継ぐ。

又二つには、先年仲たがいをして相別れました父親、今は齢(とし)も老い、我(が)も折れ、頻りに面会を求めおります由、今は父一人、子一人のわたくし、彼れをも慰め遣したく、かたがた上洛を思い立ちましたのでございます。……

と言い終って又一度辞儀をしたが、何の返事もない。

ああ、まだお行が果てぬらしい。(又空を仰いで、傾きかけたる晷(ひかげ)を見ていたが、いよいよ是非に及ばぬと定めたらしく、改めて一揖して)甚だ失礼ではございますが、おいおい日も傾きまする故、是非なくお暇いたしまする。いずれ程なく帰山致し、又お目にかかりまする。おさらばでございます。御機嫌よういらせられませ。

広足起上りて下手へ歩みつつ、巳に降り口に足を踏みかける。この時、行者は徐(おもむろ)に眼を開き、印を解き、端坐したままで

行者　まてまて。

と静かに呼ぶ。広足直に見返り、「ハハ！」と言いつつ、急いで元の処まで帰って来て手を突き、平伏し

広足　お行済(ぎょうず)みにござりますか？

行者　（静かに）主上の御悩を平癒させまいらする為に、都へ帰ると言うか？

広足　さようにござりまする。

行者　第二には、下万民が身心二つの大患を救いたいが為に、都へ帰ると言うか？

広足　さようにござりまする。

行者　又三つには、親を慰めたい為にと言うか？

広足　さようにござりまする。

行者　ふふむ！　近頃奇特なことじゃ。……（暫らくの間黙然としていたが）先刻聞いていれば、大発熱(だいほつねつ)の最中に、一大妙光に接し、はじめて何事かを自得したというたが、それは何じゃ。

広足　されば でござります。お山を下りまする以前までは、尊師のお教えをば、只高い、偉(おお)きい、尊い、厳(いかめ)しいとばかり、駭(おどろ)き仰ぎ、如何にしてその絶頂に攀じ登り果(おお)すべきかと、手頼(たより)なさに苦み、己れ自身さえも疲れ弱り、当惑し、かくては他人の教化なぞは、思いも寄らぬことと失望いたしおりましたる処、図(はか)らずも右熱病の発作中に、いずこともなく神の御ン声聞え、「洽(あまね)

く下根の衆生をして師道に追随せしめんとならば、別に一易行道を開け」という尊いお告げに接しました。

行者　ふふむ！　してその易行道とは！

広足　師は常に、万人一様に、「人は飽くまでも直ちに活き神とならんことこそ願え。二六時中、寸時も金剛蔵王の忿怒の御像を眼中から離すな。本来空の利剣を真ッ向に揮り翳して、我執貪着の妄想を斫祈い斫祈い、あらゆる苦行荒行に肉体を微塵と摧き、一心不乱、勇猛に、只驀地に精進せい」と教えさせられます。悲しい哉、末世下根の衆生は、余りに神に遠くして、獣に近く、随って御ン教えをば或いは怖れ、或いは忌み、ますます向上の縁に遠ざかりまする。是に於てこれを救うの方便として、わたくしは、先ず神獣は一如と説き、必ずしも人の獣に似たることを咎めませず、むしろ獣の天性を礎にそこに神の霊徳を築き成す、これ行者道の第一門と、かように教えましてござります。

行者　ふふむ！　半神半獣の何方つかずじゃの。……獣類の天性を、生れるや否や仁義道徳という檻に収れて飼い馴らし、だんだんに矯め直そうとするのが唐人共の所謂中和の道じゃ。それさえも、たかが、「人間」を作るの道で、「神」となる道ではない。汝は、獣類の天性のままを礎にして、そこに神の徳を築こうとする。それは馴らしもせず、鎖にも繋がずして、虎、狼を飼おうとするようなもの、汝の分際で、その考えを持すれば、つまりは獣類らの餌食となり了わるまでじゃ。「神獣一如」なぞとは虎を暴にする力量ある者の言い得べきこと。汝なぞには

叶わんことじゃわい！

この時下手の奥、深溪（たに）の方に当って、例の山鳴りがはじまり、次ぎの問答の間にだんだん激しくなる。行者ちょっと聞き耳を立てる。

広足　（少しく激した体で）師のお言葉ではござりまするが、師の平生のお教えの如く、強いて性を矯（た）め、情を殺し、ひたすら肉を滅尽する「力」をのみ養わせまするは、とても今の凡俗の堪え得ることではござりませぬ。よし「力」だけは得まするとも、それは只、冷い、酷（むご）い……

と言いかけると、行者は静かに併し手強く遮って

行者　黙れ！　末世の迷妄を根本から打ち毀（こわ）さねばならん時には、先ず「力」ほど大切なものはないわ。「力」の伴わんものは、皆無用じゃ。力の伴わん慈悲、力の伴わん深切、力の伴わん諫争（いけん）、力の伴わん勤行（ごんぎょう）、皆無用じゃ。汝（きさま）の如きは、何の自力もない癖に、あちこちの力をば借り集め、或いは盗み集め、綴くり合せ、我力の如く見せびらかし、或いはこれを以てその不所行（ふしだら）の分疎（いいわけ）となして非を飾る。堕落の捷径（ちかみち）に過ぎぬ二岐路（ふたまたみち）をば、予（おれ）が教えの易行道なぞとは、……ここな僭上者めが！……

突然の一喝に、今までは得意そうにしていた広足は、覚えず「ハッ！」と平伏する。行者は徐ろに立ち上り、錫杖を取り、鉄歯の屐を穿きて窟から歩み出でながら

小智慧の働く凡俗は、とかく小理窟に長じ、目前の利害に敏く、足下鼻先が見え過ぎて臆病になる。まして汝は、気位いの高い割に根性は柔弱ゆえ、おのずと言行に表裏矛盾が生ずる。それを又名聞が手伝うて、強いて正当らしゅう取繕おうとするによって、いよいよ自罔自欺に堕する。笑止千万な奴じゃ！　はじめから予とは縁のない奴と思うていた。もうよい、帰れ。呼び返したのは、都へ帰るのを止めようが為ではない。かりにも弟子にした奴ゆえ、これだけを餞に与らしたのじゃ。

こう言いすてて、行者は窟の右手の半天然の石磴の方へ行こうとする。広足は急にこれを止めて

広足　これはまた御無体なおっしゃりようでござります。言行に表裏があるとは、あんまりなお叱り！　最前お詫び申しました事の外には、何一つ戒律を破った覚えはございません。殊に、諸方から借り物の教えを以て非を飾り、ふしだらの言いわけにいたすなぞとは、覚えのないこ

とでござります。聊(いささ)か自得の卑見を加えて、御ン教えを和げましたは、一えに道の為、君の為、世の為にござりまする。

行者　黙れ！　何一つ戒律を破った覚えはない？　破る勇気があればまだしも、破りとうても能う破らず、何がな破る口実をと臆病な小智慧ばかりを働かす、それをば外道(げどう)中の外道というわい！　やい、汝(きさま)があの西谷で、獣神(けだものがみ)の呪いを聴き、その顛倒の邪見に惑うて心を動かし、かくて次第次第に外道に蹈み入ったことを、おれが看破らんでいると思うか？……

広足　ええ！

窮処を突かれたらしく、忽ちはっと頭を下げる。

行者　神獣一如なぞと、口がしこう説きおるが、畢竟は、あの獣神につい誓約をしおった為、抜き差しならず、また二つには、おのれめが憍慢と名聞(みょうもん)との為(せ)さする業じゃ。……何一つ戒律を破った覚えはない？　如何さま、汝は、里に留まっていた間は、外形(かたち)の上では、悉く五戒を保った、鎖で繋がれた飢(かつ)え犬が、鼻の先きの腥(なまぐ)さ物を能う食わなんだように。これ、已(すで)に心を動かした位いなら、なぜいっそ思い切って獣神に従(つ)かぬ？　生温かい女の手で撫で擦らるるをなつかしみ、熱病に罹ったを、内々は心に喜び、しかも口先きでは聖行(せいぎょう)を説く、そのいじけた根性が浅ましいわい。笑止な奴じゃ！　……（うつむいている広足の姿をつくづく眺めて、）

その服装(なり)を見い。行者が都へ登るに、何の為のその晴れ衣裳！　……心に問うて、恥かしいとは思わぬか？……

広足はじっと頭を垂れている。山鳴りはおいおい激しくなる。行者は二足ばかり行きかけたが、また立停り

末世の憍慢な、剛情な衆生を教化するに、生温(なまぬる)い中和の道なぞは役に立たん。殊に詛(のろ)わしいは汝の唱えるような似而非(えせ)中和じゃ、神となるを誓願とする行者道は「力」を本体とする。獣でも「力」を極めれば、神に近づく。汝は、初めから神には縁なく、真人間でもなく、全くの獣にもなれん奴じゃ。早く都へ帰り、正しい中和の道でも蹈んで、せめても真人間になれ。……笑止な奴じゃ！

言いすてて行者は石磴(いしだん)を登ろうとする。広足はあわてて追い縋り、その袖をひかえて

広足　ああもし、どうぞ暫らくお待ちなされて下さりませ。恐れ入りましてござりまする。只今の御厳訓で、何もかも、夢と醒め、恥じ入りましてござります。成程、わたくしは臆病者でござります。名聞の餓鬼でござります。何もかもわたくしの思いあがった憍慢な心からの過ち(あやま)

でございます。都へ帰るのは思いとどまり、以後は全く別人と生れ変り、一心不乱に修行いたしまする。改めてお弟子になされて下さりませ。どうぞこのたびだけは……

とだんだん涙声になる。山鳴り少しくしずまる。

行者　離せ。

広足　こんどだけは、何とぞ！　もう決して二心（ふたごころ）は抱きません。お腹立ちは如何にも御尤もでございますが……

行者　離せ。……腹を立つだけの縁はないわ。……離せ。

袖を払って行こうとする。又追いすがって袖を捉える。行者独鈷杵（とっこしょ）を挙げて、軽く一喝する。と広足は、忽ち袖を離し、うんと言ったきり仰向けに倒れる。行者は悠然として見返りもせず、石磴を登ろうとする。途端に、その岩坂道の向うの降口（即ち大岩の上手の裾、窟の背後）へ、前鬼が忽然として上半身を現した。そうして

前鬼　大変でございます！　大変でございます！

と叫んで躍り上り、やがて忽ち、立停った行者の前へ駈けおりて来て蹲踞(うずくま)った。

行者　（静かに）葛城めが山へ入り込んだか？

前鬼　（息を切って）さよでござります！　葛城の女主(おんなぬし)めが、今までとはちがった凄まじい勢いでつい今がたお山へ入り込みました。

行者　（静かに）　よしよし。

前鬼　（なお喘ぎながら）越(こし)の地獄谷の硫黄淵で、四十九日(ここのか)四十九夜(ここのよ)、悪魔王になる行(ぎょう)をしおって、業通(ごうつう)が自在になりおりまして、日の光りをも怖らず、ささえる精霊(すだま)らを追い散らして、もう西谷の御封鎖をも破りましたぞや。もう西谷の間近まで来ております。迚(とて)もわしらの行力では防がれません。早うござって、親子とも御呪縛して下され、一言(ひとこと)めも、きょうは元気づいて、えらい力を出しおります。つい今も大きな枝を圧(へし)折りました。

又激しく山鳴りがする。

あれあれ！　また荒れ出しおった！　あれあれ！

行者　騒ぐな。大丈夫じゃ。見廻るから、従(つ)いて来い。

行者は徐(しず)かに先きに立って、石磴を登り了り、降り口へ姿を消す。前鬼も従って登り、やがて同じく見えずなる。

山鳴りは次第に薄くなりながら、次ぎの独白の間も続いている。倒れていた広足がやっと身を起す。顔色蒼然として、半分死んだ者のようである。横くねりになって、意気地なく首をうなだれたままで、長い溜息をして

広足　「憍慢な癖に柔弱な根性！」……「何の自力もない癖に、あちらこちらから、いろいろな力を借り集め、盗み集め、綴くり合せ！……」……ああ、何という浅ましい人間じゃおれは！……成程、おれは真人間にさえもなれん。中和ということがちょうど真ン中の道ということなら、その道もおれには行かれん。思い切って険しい行者道は、師匠に見棄られた上は、もう迚も及びもないことじゃが、程よい、真ン中を辿るということは、なお以ておれには出来ん。と言うてまるきり獣類になり下ってしまいとうもない。ああ、どうしたらよかろう！……

この独白の中頃に、正面大巖の左の裾に突如として、前幕の女怪――葛城の神――がその裸形の上半身を現す。例の赤黒い丈(たけ)程の頭髪を獅子の鬣(たてがみ)の如く額に肩に振り乱して、巨きな口を開き歯を露(あらわ)して、にやりと物凄く笑ったと見る間に、忽ち巖陰へ姿を隠す。

五年以前、怨めしさと恥ずかしさと悔しさとの余りに、思い切って発心してくりょうと思うたその間際には、古えの勝者たちにも、何の、決して劣るまいと思いあがっていたのに、どうしてこんな意気地なしになり下ってしもうたか？　行者のいわれる通り、本来が名聞気からであったのか？　世の為、人の為と思うたのは、その時も、先刻までも、自分で自分を欺いていたのであったか？　「戒律を破る勇気があればまだしも？」……「生温かい女の手で撫で擦らるるをなつかしみ！」……ああ！　……

急に両方の手で頭を抱えて、忽ちそこに臥転びて、暫らくは苦悶に堪えかねた体であったが、やっと又顔を挙げて

ああ、自分をすら欺そうとするとは、何という浅ましい！　ああ、何という浅ましい！　……

こういって、しきりに頭を掻き毟っていたが、暫くして

ああ、どちらが本当の自分だか、分らんようになってしもうた！　ああ、どちらが本当の自分だか！

ふと自分の服装に目を附け、更に身辺をつくづく見て、師の行者の口吻で

行者が都へ上るに、何の為のその晴れ衣裳！　心に問うて、恥かしいとは思わぬか⁉

又急に苦悶の表情をして、うつむき、暫くは無言でいたが、ややあってもう煩悶する気力さえもなくなったかのように、悄然となって

今さら都へ帰られもせず、この上は死ぬより外に為様（しよう）がない。……とはいうものの、何か知らず、目に見えん不思議な絆（きずな）で、後ろ髪を引き止められているような気持がして、どうかしてもっと生きていたい。……死にとうない。……生きていたい。

この独白の切れる途端に、麓への降り口の手前の、通路のありそうにもない絶壁の間から、忽然として、一人の村娘が走って来た。

第一幕に見えた一軒家の姉娘のヒッジである。肌の色も、あの時よりはずっと白く美しくなり、服装も晴れ着らしく華美である。それにも拘らず、籠を背負い、手に小鎌を持っているのを見ると、山仕事の途中であるらしく、無雑作に束ねた頭髪の根元には、燃えるように紅葉した楓の小枝を挿している。で先日よりは、ずっと妖艶に見える。娘は広足の傍

へつかつかと駆け寄った。

娘　ああ、嬉しや嬉しや！　もし逢えなんだら、どうしょうかと思うたに、ああ嬉しや！　嬉しや！

取り縋って、もう嬉し泣きに泣いている。

山鳴りが止む。

広足　や、おぬしは！　どうしてまアこんなところへ？（娘の顔を見、又四下（あたり）を見廻し、夢ではないかと思う様子で）どうしてこの――女人禁制の――おそろしい処へ？

娘　（すすり泣をしながら）どのように待っても待っても、麓へは降りてござらっしゃらぬゆえ、さては久しいこと里に逗留してござったので、行者さまが腹を立てなされて、それできっと怖ろしい折檻を受けてがなござらっしゃるのであろうという皆の噂。わしゃ悲しゅうて悲しゅうて、身も世もあられず。それで家の者へは、つい山へ仕事に行く言うておいて、怖いのも忘れ、木の根や藤蔓を伝うて、やっと登って来ましたのじゃ。……ま、その顔の色は！　きつい折檻に逢いなされたのじゃな。え、大事ないかえ、大事ないかえ？

おろおろして肩や脊を撫で擦るを広足は止めて

広足　大事ない大事ない、もうどうもない。折檻されもせん。併し……俺ゃもう廃(すた)れ者になってしもうた。悟りを開いたと思うたも、みんな迷い。自分で愛想の尽きたこの身、行者殿には勘当受け、この山にはおられず、今さら都へは帰られず、どう考えても、もう生きていられようがないによって、俺ゃもう死ぬより外に為様がない。

如何にも力無げに萎れている。Ｉ３上段

娘　ま、めっそうな！　行者さまに勘当されたからいうて死ぬには及ばぬ。世間は広い。都へ帰らずとも山にいずとも、他に生きていようは幾らもあるぞな。

広足　いやいや、他に生きていようはない。

娘　あるがなあるがな、ま、わしの家へござらっしゃれ、お父さは村で指折りの人じゃ。田地も沢山あるによって、お前が一生宿(とま)ってござらっしゃったとて、苦にゃせぬぞな。

広足　ただ生きているだけでは生き甲斐がない。真人間にもなれず、獣類にもなれず、神にもなれず……

娘　（俄に男のような調子で笑い出し）ははははは！　人が神さまになれんのは知れたことじ

や！　（徐かに身を退いて立上りながら）真人間にもなれんたら言いなさるけどなア、こうしてお互いのようにして交際うているのが真人間じゃないかえ？　何もわざとらしゅう獣類にならいでもえい。なア、神さまになろうという迷いさえなけりゃ、いつでも人は真人間じゃ。

（立ちながら俯向いている広足を見おろし、傲然と）お前は神という名前に迷うているのじゃ。

広足　（俯向いたままで）ああ、名前に！　……行者もそう言われた。ああ、おれは名聞の餓鬼じゃ！

娘　（小鎌を玩具にして、あちこちと歩きながら）えらい人間と言わりょうが、神さまと言わりょうが、そんな名前が何になろう？　とりわけ、こんな豆粒のような小さな島国に残す名前が何になろう？　悪い事をしても、口を拭うていれば、浮き名は立たず、控え目にしていれば、村の頑童までが泥礫を抛げつけおる。善い名も一時、悪い名も一時じゃ。名前が何になろう！　臆面せいで面拭うて出歩いていりゃ世間の方で忘れおる。世間は案外に寛大なものじゃ。（屈んで、後ろから広足の肩を抱いて覗くようにして）なア、思う存分に生きてこそ、生き甲斐があるというものじゃ。世間を憚るには及ばんがな。お前は意地が足らん。意地をば張りなされ意地を。他が右へ行きゃ、左へ、前へ行きゃ後ろへ、とりわけ名の聞えた行者のような奴の、逆に逆にと行きゃ、それが取りも直さず、名を揚げる元にもなるがな。

広足　いやいや、邪は正に勝たれん定りじゃ。行者どのは、世を救うため、衆生を済度する為にせられるのじゃ。それじゃのに、おれが若し私慾の為に――二年ごし師匠と崇めて、いろいろ

教えを受け、恩になっていたのに……

娘　（いかにも軽蔑したように）世を救う為じゃ！　何のあれが世を救う為であろう！　酷い、我強い、高慢面が、自分勝手の遊び仕事！　出来そこねたあの磐橋が何になる？　自力で難所を越せばこそ修行ともなれ、他力で架けた橋は大きな外道じゃ。まして半出来の橋が何になろう？　彼奴、我を通したいばッかりに、衆生済度を言い立てに、愚民を惑わし、道にも理にも合わん、酷い、苛い訓練方をしおるによって、一人として随いて行き得た者はない。あれは心をも身をも殺す教えじゃ。あのような邪教が何になろう！　あいつは十七で山入りをしたというが、それが真実なら、浮き世の味の酸い甘いを知る暇がのうての悟り三味じゃによって、思いやりが無い筈、酷い筈、邪樫な筈じゃ。

広足　（首を垂れたままで）とはいえ一旦師匠として恩を受けたあの行者に……

娘　恩を言や相身互いじゃがな、お前は、つい先頃までは、彼奴の為に水を汲んでやったり、薪を拾うてやったりさっしゃれたであろう？　なりゃこっちからも恩を掛けたのじゃがな。（頬が摺れ摺れになるほど顔を寄せて）お前は気が弱いによって、今の自分を責め、過去の自分を責め、済まん済まんとばかり思うてじゃが、穴ぐり立てをすりゃ、世間に疵のない人間は、只の一人もありゃせぬぞな。悟り顔のあの行者とても、若い時分には、何をしおったか知れたものじゃない。今じゃとて、保っているのは、たかが五戒じゃ。が、まだ枯れ木のように朽ち果ててしもうた齢でもないによって、その五戒さえも（と言いかけて窟の方を見返り）試して見

んうちは当にはなりゃせん。

娘が幾ら励まして見ても、広足は萎れ果てて、更に勇気を出しそうにもない。

広足　いやいや、おれゃどう考えても、本当の人間にもなれず、神にもなれず、獣類（けだもの）にもなれず、都へも帰られず、生きて行く便宜（よすが）もないによって、死ぬより外に為様はない。

娘の表情や態度が、又元の村娘に戻って

娘　真（ほん）の人間、真の人間と言いなさるけれどなア、真の人間じゃて、偽の人間じゃて、百までとは生きらりゃせんぞな、生きるのは何もむずかしゅうはない。食うてゆかるれば生きてゆかる。夫婦親子が仲よう暮すことが出来りゃ、一生面白うも楽しゅうも過せるぞな、もし。わしの家（うち）へござらっしゃれ、なア、わしの家へ。わしゃお前の為なら、死んでもかまやせんぞな、もし。なア、もし。……なア。……

娘は広足に寄り添うて、優しい、柔かい小さい声で、頬を摺り寄せ耳こすりするように口説く。広足は次第に夢を見ているような心持になる。娘は立上って麓への降り口まで行き、

振返って、手招きする。と広足は、目を閉いだまま、ふらふちと立って、娘の方へ行く。娘は降り口を降りながら、又招く。娘の頭が見えなくなる。広足はなお目をふさいだままで、これも降り口を降り、見えなくなる。

又山鳴りが聞えはじめる。

窟の後ろの石磴の登り口へ、ちらり行者の角帽だけが見える。が、行者は直ちには登って来ない。ややあって全身を現したのを見ると、先刻のように元気ではなく、気分でもわるいか、錫杖を力に、徐ろに降りて来て、窟に近づき暫くその入り口に身をもたせかけて、立停った。顔の色が著しく変って、蒼白く見える。やがて太い溜息をして

行者　千里の外を透観し、百年の末をも察り知る我がこの心眼が、何として今日ばかりは暗んだるぞ？　愛惜の絆を絶ちかね、已に先頃も我が不在中に、一たびここへ尋ねて来て、空しく立帰られた我が老母が、きょう又最期の病いを押して、はるばる尋ねて来られようとは、今が今までも気が附かなんだ！（と徐ろに立直り、やがて印を結び、暫く瞑目していたが）むむ！　はや山腹まで辿り着かれた。……いたましい老いの姿！　……目は盲い、腰は弓と曲って、明日までとは持たぬ病体！（と言って目を開いて）恩愛の血は枯木の液と乾き果てて六十をも越えたる俺を、まだ故の通りいたいけな乳呑み児ででもあるかのように思うて、川を渉り、山を越え、病苦をも打忘れ……（又暫らく目を閉ぎ）あれ、あのように、瑞歯ぐむまで老いさらぼい、定命旦夕に逼

った身で……

と言いかけて、覚えず目をしばたたき、両眼からはらはらと落涙し、遂に堪えかね、右の手で半面を掩うて、声は出さねど、しばらくは嗚咽しているらしかった。が、やがて愕然として心附いた体で、両眼をかっと見開き

や！　どうしてこの心に隙間があったぞ?!　一切の塵縁を断滅し、あらゆる恩愛を棄て、悉く無為に入って、金剛不壊の大誓願に住するおれが！　山の主をも魑魅をも自由自在に駆り使うおれの心が、なぜきょうばかりは動揺き騒ぐぞ？　……ああ母！　……ああ、母という仮の相に！

行者は、またよろよろとよろめいたが、やっと踏みこたえて、窟の前の岩角に腰を掛け、なお額に手を加えたまま、俯向いている。山鳴りなお低くなりながら続く。

と、麓への降り口の、老松の根がたへ、突然一個の目の覚めるような美女が、藤蔓にすがって徐らその半身を現わした。やがて杖と藤蔓とを力に辛うじて岩路を登り了って一休みして、なお微かに喘ぎながらこちらへと進み来る。天女かと思う程に艶麗な、気高い都美人で、飛鳥の都の朝廷などに仕えている采女ででもあろうかと思われる。その服装は所謂

天平式の格外に出でたけばけばしさではあるが、極めて品よく、襟のあたりや腕首には、金銀珠玉の目も文(あや)な飾りまでも附けている。齢は十八九。窟近くへ来ると、やや早足に進んで、忽ちはたと膝まずいて、行者に向って恭しく礼拝した。心附かずにいたらしい行者はこの時はじめて頭を挙げて、きっと凝視したが、やがて少しく姿勢を正し、無言のまま半眼に見おろしている。女は哀れな涙の声で

美女　お助け下さりませ！　お助け下さりませ！

と言ったきりで暫く泣いている。

行者は次第に寂然(せきぜん)となって、いつの間にか瞑目してしまう。山鳴りもいつしか止んで、天地ともに闃(しん)となる。女は又口を開く。

行者さま、どうぞ妾(わたくし)をお助け下さりませ！　人間の栄華や恩寵はほんとうに春の花の一時よりもはかないものじゃということを、身にしみじみと思い知った者でございます。この黒髪を根元から切り払うてしもうて、全く男となりまして、いかな捨身(しゃしん)の難行苦行をも積んで、活き神の行者さまに一生お仕え申す覚悟をして参った者でございます。活き神さま！　活き神さま！　罪障の深い女人の中でも、とりわけて罪障の深い妾でございます！　お慈悲でございま

す。どうぞどうぞ、お助け下さりませ！　……どうぞ、どうぞ！　……

折々嗚咽するので言うことがよくは分らない。行者はやッぱり瞑目している。美女はだんだん行者の傍へ摺り寄って来て、泣きながら、とぎれとぎれに言う。

十六の秋から今年へ掛けまして、まる三年の間……帝（みかど）の御寵愛を受けまして……玉敷きの大宮きって、並ぶ者もない栄華の身の上となりましたのが因果となり、それはそれは口にも言葉にも言いようのない辛い辛い苦患（くげん）を受けました。……それが為に、今さら悔（くや）んでも帰らん罪業をも犯しました。怖ろしい他（ひと）の妬みの焔おが、昼となく、夜となく、この身を焚（や）き、讒言（ざんげん）の鋭い刃（やいば）がこの胸を抉り、冤（むじつ）の罪に、たった一人の……たった一人の母をも殺され……我が身の危かったことも幾たびか、……その怨みやら、身の為やらで、つい悪い心が起り、この手をこそ汚さね、怖ろしい企みごとに大勢の血を流させました。……わるいことをいたしました。……未来が怖ろしゅうございます。いても立ってもおられません。……罪障の深い身を、どうぞ御不便（ごふびん）におぼしめし……お弟子になされて下さりませ。……この苦患をお助けなされて下さりませ！

女は又泣伏してしまった。この時例の麓への降り口の下で、けたたましい鈴の音がすると

同時に、「行者さま！　行者さま！」とけたたましく呼ぶ声が聞え、程なく一個の怪物が半身を現す。これは後鬼（ごき）なのである。手には鐸（すず）を持っている。

後鬼　行者さま行者さま！　ひょんな事になりました！　早う来て下さりませ。お吩咐（いいつけ）リ通り、早速お傍へ参りまして、お侶（とも）の剛力に憑（のりうつ）っていろいろとおだまし申し、お袋さまを麓へお連れ申そうといたしますうちに、何にせい病みほうけでござらっしゃるゆえ、旅疲れやらお歎きやらでだしぬけに気絶してしまわっしゃりました！　早う来て下さりませ。早う！　早う！

こう言いすてて、また忽ち姿を没した。端然としていた行者の体がゆれはじめた。その面上には苦痛の影が浮んだ。泣き伏していた美女はそっと顔をあげて、行者の顔の色を窺った。

美女　なアもし行者さま！　活き神さま！　母御様とても女じゃ。なアもし、母御さまをいとしゅうお思いなさるお慈悲があるなら、同じ女の性（しょう）を受けた妾でござります。不便がって下さりませ。せめて今日だけなりと、お傍において下さりませ。……もしもし。……

行者の膝に恐る恐る手をかけてゆすぶる。行者の顔に苦悶の色が見える。

母御さまも女なりゃ、わたしも女じゃ。同じように、仮りにこの世に生を受けた女じゃ。何が違う？　どう違う？　つれのうなさるのは不道理じゃ。もぎどうじゃ。理が通らん。無理じゃ。無理じゃ！　無理じゃ！　……

又つっ伏してヒステリー的に泣き出す。行者の顔の苦悶の色は、ようやく消えて、次第に端厳の相が加わる。ただ顔の色だけは平生とは異って真蒼になっている。

女をば不浄な者じゃ、汚らわしい者じゃと言いふらしなされた釈迦牟尼仏さまが怨めしい！何が不浄じゃ？　男とどうちがう？　どう劣る？　男には己れ一代を作り変える力はあっても、新しい代を作る力はない。世の中に女が無かったら、新しい世は生れん。人を生むも育てるも導くも、みんなみんな女の力じゃ。それなりゃこそ慈悲を司る菩薩たちは、どれもどれも女相じゃ。なアもし、こなたがまだ幼稚けなお児さんであった頃に、雪霜の降る冬の夜半も、わが身を忘れて抱きかかえて、いとしがり、ぬくめたは、（と言いながら襟元をくつろげて）これこの温滑な、柔輭な肌じゃ。なア――これがこなたの懐かしがってお吸いやった乳じゃ、――このふくよかな、ぬくい、柔い乳は、取りも直さず母御さまのおやさしい面影じゃ。世の中にこれほどなつかしいものが又とあろうか？　女人の肌を男子が慕うのに何の不思議

がある？　幼い頃の最ち懐かしい思い出はこれじゃ。命にも易える浮世の最上の歓びはこれじゃ。（今までの気高さがいつの間にやら消えて、目にも口附にも姿態にも、人を蕩かす妖艶の気のみが溢れている。）栄華も権勢も名誉も富も健康も、この歓びがなかったら、何の生きている甲斐があろう？　幼い時か、春を知る頃か、浮世の艱みに疲れた頃か、いつか一度一生中に、女人の情けの有難さを思い知らん男があろうか？　なア、悟るに四季は無い。正覚成道は七十八十になってからでも晩うはない。　この歓びには季がある。その季を逃いたら、もう二度とは来ん！……この歓びを知り尽いて、そうして捨ててこそ本当の悟りじゃ。……や！　こなたは存外に弱いお方じゃなア！　これ、この肌を見ては悟られぬかいな。この手に触っては気が散るかいな。……なアもし。……なア……。

又行者の膝に手を掛けて狎れ狎れしくゆすぶる。行者は寂然として、まるで石の像のようである。

ええ胴慾じゃ！　これほど事を分けていうものを聴いてくれん！　何たる酷い人じゃ！　ああ、悲しや！　悲しや！（狂人のようになって）ああ！　わしゃもう気がちがいそうじゃ！……ああ！　……ああ、わしゃ気がちがう！　気がちがう！　……

だしぬけに躍り起きて、そこらを走り廻る。そのうちに黒髪は自然と解けて、乱れた糸のようになる。我れと我が被(き)ている物を引きちぎっては拠つので、腕や胸や脛の辺は半ば露わになる。やがて又行者の傍へ走り寄って、その前後左右に顛倒し転輾(てんてん)して、或いは媚び、或いは戯れ、或いはしなだれ、狂態の限りを尽くす。

ええ、この憎い憎い活き神さまめが！　怨めしい、もぎどうな活き神さまめ！　なア、これ、せめてもわしの冥加の為じゃ。さ、活き神さまの手でこの手をば握って下され。さ、ちょっと握って下され、ああ、せめてその蒼い、尊(たつと)そうな頬へ触りたい。（両手を行者の肩へ掛けて）さ。おお、石仏のようかと思うたら、ああ嬉しや！　やっぱり温(ぬく)い血が通うている！　さ、冥加の為じゃ、活き神さまの息をこの口へ吹き込んで下され。さ、この口へ！

この時までは寂然と石の像のようになっていた行者が、今唇をさしつけた妖婦の体へ、その手を触れたかと見る間もなく、女は二三間此方へ忽ちころころと抛げ出された。が、すぐ猫のように、ひらり宙返りして起き上って、猛然として飛びかかろうとする。と、行者はすっくと立上って、大きな声で

行者　喝!!　……邪神(じゃしん)めが！

妖婦は、くるくると居どこで三度ばかり独楽のように廻ったが、廻り止まると身を翻し、飛ぶように例の胸壁際まで逃げ、岩櫓の上に突立って髪を逆立て、口を開き、眼を嗔らし、肘を張り、身がまえして行者の方を見返る。行者は言葉鋭く

あざといい己れなぞの業通で惑わされる行者と思うか？　たった一疋の白蟻を這い込ます穴からも雲に冲る喬木が朽ち倒れる。たった一筋断ち残いた「母」という執着の目に見えん鉄線にからみつかれて（大息をつぎて）五十年を一日のおのれの行の息の根が、すんでの事に縊らりようとした悩乱の隙に乗じ、おのれ、大胆にも邪婿を勧めて、堕そうとしおったな。おのれの顔色に苦痛の見えたを、おのれが誘惑のきいた故と思いおったか。おろか者め！　ありゃ大正覚、大成道の最後の産苦じゃ！　たった一重残っていた最後の執着の生き皮を、この魂から剥がるる苦悶じゃ！　喝!!

女怪は只一声岩を突裂くような苦叫を発して、忽ち千尋の谷間を目がけ、身を翻して躍り入ってしまった。行者は更に大息をつきて

天上天下只一つの大いなる「我れ」あるのみじゃ！　不滅不増、絶対常住の「我れ」あるのみ

じゃ！　彼れ我れと別つ我れはない。人間も無ければ、禽獣もなく、鬼神もない。母もなければ子もなく、男もなければ女もない。善もない、悪もない、生もない、死もない。ただ有る者は大いなる「我れ」の力ばかりじゃ。（ふと窟の方を見て）むむ、あれじゃ！　あれが俺の魂の息の根を縊ろうとしたのであったわ！……

つかつかと窟の中に入り、内に安置してある弥勒菩薩の青銅像を持って出る、如何にも軽々と。

日が暮れかける。

末世憍慢の衆生は、ひとえに顛倒の邪見に着して、相批議し、相誹謗してやまんのを、智慧で化度しょうとするのは、底無しの井戸の溺死人を我れもそこに躍り込んで救い上げようとするようなものじゃ。……況んやこんな柔輭な御相では、我慢剛情で乾固った濁世の人間を済度することは思いもよらん。智慧と慈悲とに於ては無能勝と崇められなされる弥勒菩薩どの！　お前さんを俺の本尊仏と心の奥の龕の内に祀っておいたのが、たった一つ払い残いた魂の埃であったのじゃ！　広足めの小才覚を叱咤したその口の下から、生中の慈悲の為に、智慧の為に、あぶなく自分を欺くところであった！　ああ、もう慈悲もない、無慈悲もない、ただ有るものは大いなる「我れ」の力ばかりじゃ。……

手に持った弥勒仏を捨てるように地上に抛つ。又山鳴りがはじまる。麓に当って角(かく)を吹鳴らす音がだんだん高く聞える。この時麓への降り口から韓国(からくに)の広足が再び登って来る。服装は先刻と異ることもないが心の作用(はたらき)に何か変化があったらしく、蒼かった顔色も常に復し、得意そうでもないが、不安らしい体も見えぬ。行者の前まで来ると、恭しく跪きて敬礼する。

行者は立ったままで徐ろに見返り

行者　おれにはもう縁のない奴、何しに来た？

広足　御勘当のお詫びに参ったのではございませぬ。……幾たびも迷いに迷いましたる末、先刻再び妖魔の為に、あわや誑惑(きょうわく)せられようといたしましたが、きびしい御教訓を受けました余徳によって、辛うじてそれを脱(まぬが)れ、いよいよ真人間になることを目的に、都に帰ろうと決心いたしました。それゆえ改めて、お暇乞いにあがりましたのでございます。……一つは又、聊(いささ)か御恩返しがいたしたい為でございます。

行者　何じゃ？　恩返しじゃ？

行者は徐ろに傍らの岩に腰を掛ける。広足は跪いたままでいる。

広足　先刻さる妖しき女に誘われ、夢心地にて麓へ下りまする途すがら、師のお身の上に、思いがけない御災厄が逼りおりますることを伝聞りました。何者の讒訴にや、師がこのお山に籠らせられたは、畢竟日本国を魔界となさん逆心あって帝を調伏の為なり、云々との誣言。二つには多年邪法を修し、愚民を誑惑するの罪とござりまする。程なくこれへ討手の者が押寄せ参りましょう程に、片時も早くお立退きなされませ。

行者　それを知らせるのを、恩返しじゃというか？

広足　いや、そればかりではござりませぬ。只今あらためて登山いたしまする途中、図らずも師の母御様にお目にかかりました。堪えがたい御愛惜の余り、甚だしゅう病み疲れさせられた御老体におわしながら、剛力に扶けられ、已に麓から殆んど三里ほども登らせられましたるところ、険阻に悩み、御病気募り、九死一生の御ン有様、ちょうどわたくし参り合せ、御介抱申しあげ、取りあえずとある樵夫の仮り小舎へ一先ず御休息おさせ申しては参りましたものの、最も心懸りに存じまする事は、はやその近辺まで討手の近づきおりますることでござります。万一にも母御さまをば彼等見附けましょうならば、御ン大事にござります。必ずや母御様を人質となし、否応なしに師を捕えようと致すに相違ございません。前鬼、後鬼にお命じあって、御猶予なく、南口から母御さまをお落しなされ、なお尊師にも早速御下山なされますよう、ひたすらお勧め申しまする。討手は已に四方八方を隙間なく取囲んでおりますゆえ、師御自身の御

法力で御擁護遊ばさねば叶いますまい。

広足は言葉せわしく述べ立てたが、行者は自若として、更に色をも動かさない。

行者　大誓願を立ててこの山に登った俺じゃ。その本願の成就せんうちは、どんな事があっても下山はせん。

広足　では、母御さまの御一命にかかわりましても？

行者　（儼然として）おれには母は無い。有るものは大いなる「我れ」の力ばかりじゃ。

暫くは双方無言。角（かく）の声が殺気を帯んで聞える。

広足　成程、行者道からは、さように仰せられまするのも、御尤もでございましょう。では、是非に及びませぬ、これにて御暇をいたしまする。（と立ちあがり、行きかけたが）が、御安心なされませ、幸い都へ帰りまする広足、御恩返しの為に、竊（ひそか）に母御さまを御介抱いたしまして、討手の兵士らの目を眩し、何とかしてお落し申しましょう。おさらばでございます。（行きかける。）

行者　（手強く）待て！　……無礼者めが！

広足立ちどまる。

汝なぞの力を借りる行者と思うか？　……やい、若しおれが私情に着して、母を救おうと思うならば、平生鬼神をも精霊をも自由自在に駆り使う神通力のおれじゃ、他力を借りるには及ばんわい！　行者道にとっては、他力は魔障じゃ。

広足　では、見す見す、お齢よられた実の母御さまをすらも？

行者　くどい！　おれは「力」じゃ。「力」には母はないわい！

広足は再び何か言おうとしたが、思い返したらしく口をつぐみ、黙って一揖して起ち上り、降り口の方へ五六歩行きて、見返ると行者は窟の方へ歩みて、先刻棄てた弥勒菩薩の像に目を注いでいる。

広足　（独白）神の道は、果してそれほどに嶮しい、酷い、冷いものであろうか？　並の人間に帰ろうと思い立って見れば、いよいよおれは神の道には縁はないわい！

考えに沈んだ体で、徐かに麓へと降りて行く。日が暮れる。角の声が近づく。

行者　（弥勒の像を見下していた目をあげて、空を見上げながら）かりにも他力を恃(たの)んだのは、俺の払い残していた惑いの一つじゃ。あの獣神(けだものがみ)を呪縛した禁厭(まじない)の力さえも、今思えば一種の他力であったわ！　もうこれからは、何者をも恃まん、わが信念の外に何物をも恃まん、信念は「力」じゃ。「力」は信念じゃ。（また脚下の像に目を附け）只一時を緩うする麻酔薬(しびれぐすり)のような柔輭仏(にゅうなんぶつ)、おのしのようなものが何になろう？　元の土塊(つちくれ)へ戻ってしまえ！

像を提げて、胸壁の方へ歩み、やがて谷の方へ抛つ。山鳴りまた激しくなる。と石磴(いしだん)の登り口から、前鬼が又あわただしく駆け降りて来る。

前鬼　行者さま！　行者さま！　とうどう葛城の神が西谷へ入込みましたぞや、早う来て下さりませ。わしらの行力ではどうすることも出来ません。一言めがどえらい力を出しおります。今にも幹を引き裂いて、樟から脱け出そうも知れません！　行者さま！　行者さま！

行者の前に跪いて、急(せ)きたて、又登り口へ駆け登って、彼方を見おろし、又駈け降りて来て行者の袖を引き、早く取り抑えに行けと種々と手真似をする。行者はそれには関わず

行者　（独語に）おれの定業尽きた後まで、「力」の教えだけは伝えておこう。……

前鬼　今にも脱け出しおるかも知れません。早う来て下さりませ。……

行者　「力」の像を残しておけば、たといこの後……

前鬼　行者さま！　もし！　もし！

山鳴りますます激しく、角の声はだんだん近づく。四方はだんだん暗くなったが、討手は炬火をともし連ねて来ると見えて下手の空が薄赤い。前鬼は堪えかねたらしく、身を翻し、飛ぶが如く石磴を駆け登り忽ち見えずなる。

行者　おれがこの世におらずなっても……むむ！

この途端、思いがけぬ岩櫓の右手を攀じて後鬼が跳り登った。

後鬼　大変でございます！　大変でございます！

と息を切って行者の前へ駆け寄り、転ぶように突伏したが、二の句を継ぎ得ないで、泣いている。

行者　（静かに）お袋が討手の者に捕まったか？

後鬼　（嗚咽しながら）さよじゃ！　さよじゃ！　どうしましょうぞい！　どうしましょうぞい！　隠れさっしゃろう暇（ひま）も無かったのじゃ。（行者は自若として立ったまま瞑目している。）討手の者は好い人質じゃと言うて荒けなくお袋さまを引立ておりまする！　若しこなたさまが素直に囚人（めしうど）にならっしゃらねば、お袋さまを直（すぐ）刺し殺すと言うておりまする。どうしましょうぞい！　どうしましょうぞい！

降り口の彼方が炬火（たいまつ）でおいおい明るくなり、多勢の声が聞える。

あれあれ！　もうそこへ来おりました！　行者さま！　行者さま！

後鬼は、あちこち走りまわりて騒ぐ。

これよりさき、行者は、それには関わず、石礎を登り、ちょうど窟の頂きに当る処に立って、大岩をきっと見あげて、独り語に

行者　おのれ五十年の勤行（ごんぎょう）に験（げん）があるなら、三十余年棲み慣れたこの窟の大巌よ、我が念力と行

力とによって、在りかたのまま立ちどころに、左手に三鈷杵を握り右手を開き、腹を圧えて降魔の相を成し、両脚を上下にして天地経緯の相を示させられる金剛蔵王の像と現ぜよ。大忿怒、大勇猛の像と現ぜよ。

行者は徐ら合掌し、道場観を念じて、孔雀経を誦しはじめる。

壇上有金色孔雀王、其上有白色蓮花、蓮花上有庚字、変成孔雀尾、尾変成孔雀明王、住慈悲相具四臂、……

どっと鬨の声が起る。後鬼はいよいよ狼狽して又降り口まで駈け行きて下を見おろす。と、下から明晃々たる矛の鋒が一本ぬっと出る。後鬼驚いて飛び退く。この間行者は誦経を続ける。

右変第一手執開敷蓮花、第二手持具縁果、左第一手当心持吉祥果、第二手執三五茎孔雀尾、七仏慈氏、四辟支仏、四大声聞、八方天王廿九部、夜叉大将、諸鬼神衆、并諸宿曜十二宮神等、前後囲繞。

この誦経中に降り口へ討手の頭人の武官が半身を現す。

武官　やいやい、その方が役(えん)の小角(おづぬ)か？　上意じゃ。きっと承れ。……その方年来邪法を修(しゅ)し、愚民を惑わし、剰(あまつさ)え恐れ多くも天朝に対し奉って、大逆を企つるの由訴人あって明白なれば、朝命を承り、召捕りの為に相向うた。……

行者は関わず誦経を続ける。後鬼は頻りに気を揉む。

速かに下山せい。早速下山すれば、御仁政とあって、罪科幾等を減ぜさせられる。万一手向い致す時は、ここに召連れおるその方の老母を、立ち所に於て誅戮(ちゅうりく)に及ぶぞ。……さ、どうじゃ？速かに下山するか？　どうじゃ？

口では手強くいうが、行者を怖ろしく思うと見えて、登っては来ない。「さ、どうじゃ？」という頭人の言葉の切れ目に部下の者が鬨の声を挙げる。

これより先き行者は経を誦し了って、更に声聞印を結んで、真言を唱えはじめる。

行者　南麼(ノウマク)、三曼多(サンマンダ)、勃馱喃(ボダナン)、計都(ケイト)、鉢羅底也耶(ハラチヤヤ)、微蘖怛(ビキヤタ)、迦羅磨(キヤラマ)、儞社多皤(ニリジヤタウム)、

この真言を唱うること数遍に及ぶ。そのうちに頭人は降りて行った。後鬼は前に女怪が駆け登った岩櫓の上へ走り上りて下手を見おろしていたが、忽ちけたたましく

後鬼　あれあれ！　凄じい剣を抜きおりまする！　あれあれ、お袋さまをば引ッ立ておりまする！

後鬼は行者の方を見て叫ぶ。途端に、頭人の武官が再び出て来た。

武官　やい、小角！　尋常に下山するか？　老母の喉笛を掻き切ろうか？　さ、どうじゃ？――（又鬨の声。）ただいま角を三度吹鳴らす。その間に返答せんと、老母の命は無いぞ。

と言いすてて、また姿を消す。

このうち行者は第一の真言を唱え了って、更に七仏の印明すなわち普印を結んで一切心真言を唱えはじめる。

行者　南麼（ノウマク）、三曼多（サンマンダ）、勃馱喃（ボダナン）、薩婆（サラバ）、勃多菩提（ボダボウジ）、薩怛縛（サトバ）、干粟馱耶（キリダヤ）、惹吠奢爾（ニャハイシヤニ）、南麼薩婆（ノウマクサラバ）、尾帝莎訶（ビテイソワカ）。

この時石磴の彼方から前鬼が、けたたましく

前鬼　行者さま！　行者さま！

と叫びつつ石礎の頂きへ駈け登り、やがてこちらへ駆け降りながら

もう迚も防ぎ切れません！　卑怯な弱虫の精霊（すだま）等は、どいつもこいつも変心しおって、獣神（けだものがみ）めの眷属（けんぞく）になりおりましたぞや！　今にも樟（くす）から脱け出しおりまする！　葛城めが焔おの息を吹きかけ吹きかけして、樟をば焼き切ろうとしております。早う来て下さりませ。……行者さま！　行者さま！……

行者の傍へ駆け寄って、その袖を引き動かす。

この時第一回の角（かく）を吹き鳴す。後鬼はまた岩櫓へ駆け登って下を見て

後鬼　あれあれ、お袋さまの胸元を！　胸元を！　……

山鳴りがすさまじくなる。

前鬼　行者さま！　行者さま！……

行者更に慈氏印を結ぶ。第二回の角を吹き鳴す。

行者　南麼（ノウマク）、三曼多（サンマンダ）、勃馱喃（ボダナン）、阿爾南闍耶（アジナンジャヤ）、薩婆薩怛嚩（サラバサトバ）、奢耶努蘖帝（ジャヤドギャティ）、莎訶（ソワカ）。

後鬼　あれあれ！　あれあれ！

山鳴りますます激しくなる。前鬼も行者から離れて、岩槽へ駆け上って後鬼と共に気を揉む。行者更に縁覚印（えんがくいん）を結ぶ。第三回の角を吹き鳴らす。

行者　南麼（ノウマク）、三曼多（サンマンダ）、勃馱喃（ボダナン）、嚩（バク）。

前鬼、後鬼苦叫を発して岩の上からころげ落ち、そのまま行者の立っている岩頭を見上げて身もだえし

前鬼　とうどうお袋さまを……！　お袋さまを……！

後鬼

と突伏して泣く。降り口の下で鬨の声を挙げる。行者はそれに関わず、更に根本印を結んで、次の真言を繰返し繰返し一心不乱に祈り立てる。

行者　唵麽庾囉（オンマユラ）、訖蘭帝（キランテイ）、蘇婆訶（ソワカ）。

山鳴りますます凄まじく、窟がゆらゆらと震動する。その頂きその他の岩石のあちこちが、すさまじい響きと共に、がらがらがらがらと砕け落ちる。破片が雨と飛ぶ。行者が祈っている身辺へも大小の岩石が乱れ落ちる。土煙が朦々と起つ。討手の方へも、胸壁の一部が崩れ落ちたらしく、「わあ！」と多勢の叫ぶ声がして、麓の方へ逃げ走る足音が聞える。矩火の光りが薄くなり、やがて下手が真暗になってしまう。前鬼と後鬼とは狼狽（うろた）えながらも行者の身を気遣って、石磴を駈け上り、岩頭から離れさせようとするらしいが、落ち来る岩石に恐れをなして、行者の傍へ近づき得ない。

行者　南無やこの大巖（おおいわ）よ、たちどころに金剛蔵王の像（すがた）と現ぜよ！　喝!!

この一喝と同時に、窟の頂きに近く突出していた最大の奇岩がすさまじい大音響と共に墜落したらしい。と又一しきり摧(くだ)け落ちる岩石の雨。四方は夜の闇と土煙とで、忽ち瞑朦となってしまった。前鬼と後鬼とは、この大音響で、わっと叫んで、尻居に倒れた。やがて次第に闇は薄れて来たが、行者の姿も、前鬼、後鬼の姿も見えない。鳴動は忽然として止んでしまった。

天地関寂(げきせき)として死に果てたようである。

巨巖は依然として真黒に空を摩して厳然として屹立している。

と見ると、その形が前とは全く異ってしまった。嗚呼これ真の天工！

雲際に聳え立つ金剛蔵王の大忿怒の立像！

空はいつの間にやら紺碧のように晴れ渡って、大天井ヶ岳の彼方に、物すごく燦めく北斗七星。そのこちらに、ふわふわと流れて行くのかとも見える綿毛のような白雲が一片。

前鬼と後鬼とが、又どこからか出て来た。行者を捜すらしく、いかにも懸念そうに、あちこちと駈け廻ったが、前鬼はふと顔をあげて、北方に漂う綿毛のような白雲に目を附け、急に後鬼の袖を引き、崖際まで連れていって白雲を指さし示す。暫く何か囁きあい、指さしつつうなずきあっていたが、遂に二人とも膝まずいて、恭しく合掌し、白雲の漂う方を拝む。

遠くで角の声が聞える。

底本　日本国民文学全集　第33巻（現代戯曲集）
出版者　河出書房新社
出版年月日　1958

（大正五年九月　新演芸）